

『タイ国情報』43巻3号(2009年5月号)所載

タクシン支持赤シャツUDD派の大攻勢、パタヤー-ASEAN サミットの流会 2009年
3月 4月のタイの大政争

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授、村嶋英治
2009年5月26日記

はじめに

2009年3月26日から4月14日の20間に亘る、タクシン支持の赤シャツ派(公式には「反独裁民主国民連合戦線」、タイ語はノーポーチョーNor.Por.Chor.、英語は National United Front of Democracy Against Dictatorships 即ち UDD)による集会・騒乱は、タイ政治史上、一世紀中に数度の頻度でしか生じない重大事件と考えてよいのではないだろうか。16ヶ国首脳がパタヤーに集まったアセアンサミットを、4月11日に中断に追い込んだという未曾有の事件はあったにせよ、集会・騒乱の規模で見ると、バンコクでの集会者数は最大で10万人足らず、多数の死者が出たわけでもない。バスや建物への放火も限定的だ。それでも、この騒乱をタイ政治史上の重大事件であるとする理由は、6年間タイの首相の地位にあった人物が、海外から衛星テレビ放送を用いて、タイの統治構造の根幹である枢密院、軍部、司法などを「アマーターヤティパタイ」(筆者の意識では「お上の政治」もしくは「お上の支配」)であると正面から批判し、下々の民衆の利益にかなう真の民主主義構築のために、政治制度のみならず、社会制度の変革を訴え、不公平・不平等な扱いを受けてきた下々の大衆に対して闘争参加を煽動したからである。タクシンは海外(ドバイ等)から、3月27日から4月13日までビデオリンク放送や phone-in にて、バンコクの総理府前の主集会場や北タイや東北タイなどの県庁前の集会場に集まった赤シャツ派に訴え、かつ赤シャツ派の中核リーダーたちを指揮した。彼の演説は、衛星放送 D Station TV やタクシン支持派のコミュニティ・ラジオにより、集会場に集まった民衆のみならず、全国の各家庭にまで届いた。

タクシン演説は、民主主義の原則を掲げて、既存政治体制の理念に根本的な挑戦を試み、その正統性を真っ向から踏みにじった。敗北に終わったとは言え、そのインパクトの大きさは、1970年代後半の最強時に全国各地の解放区で総計100万人以上を支配した¹タイ共産党が既存体制に与えた衝撃よりも大きなものと思われ、今後、長期に渡って根深い影響をタイ社会に残すものと思われる。タイ政治史上、これに匹敵する敗北事件は1933年10月のポーウォラデート親王の反乱や1949年2月26日のプリーディー・パノムヨンの王宮反乱まで遡らねば見あたらない。

今回の赤シャツ隊の闘争は、タクシン自身が表面に出て、陣頭指揮を行った。タクシンは大胆で、目標実現のためには敢えて危険を冒す、投機家的性格であると言われるが、タ

¹ ノート39

イ人が人生の区切り目として重視する還暦を目前にしたタクシン（1949年7月26日生）は、自分の年齢を十分に意識しつつ、数十万人のピープルズ・パワーで一気に政変を起こすべく、人生最大の（そして最後の？）大博打を打ったのであろうか。20日に亘る闘争は成果なく終わったが、不退転の決意のタクシンの演説には迫力があり、その分、支持者に対して訴える力は大きなものがあったと思われる。

3 - 4月の政治の過程では、タイ政治情勢が緊迫した際にはいつも生じる、タイ人の政治行動が、繰り返された。政府側、赤シャツ派側の双方が垂れ流す虚実不明の数々の謀略宣伝用のデマ、流言蜚言の類で大騒ぎするテレビ局や新聞、何の非もない無辜の庶民の命が政治宣伝のためだけに奪われているのではないかと疑われる不可解な死の連続、上司の命令にも馬耳東風の警察の「ギア・ワーン」、公道上でギャング映画並に発砲する殺し屋たち、あるいは放火未遂や暗殺未遂など田舎芝居的小陰謀、狡知の数々など。

同時に、パンロップ大将やソンティの暴露や行動からは、タイ・エリート間の結合のよろさ、すなわち、目前の利害的思惑から一時的に結びつくが、意に添わないと短期間で、簡単に解消され、裏切り合う関係が浮き彫りになった。

また、ビデオリンクで、タクシンからおねだり小僧扱いされたカシット・ピロム外相の憤激や、中小企業（SME）の政治会社のタオケー（オヤジ）と揶揄されたネーウィン・チットヨーブの反撃からも、タイの政治エリート社会の一端を、垣間見ることもできた。

本稿は、バンコクおよび東京で視聴したタイのテレビ、ラジオ放送、ウェブ情報、加えて3月と、4月末5月初めの2回の在タイ中の見聞やかつてのインタビュー・ノートなどを資料として、本年3月～4月のタイの大政争の一端を報告したい。（なお、赤シャツ派の主要宣伝手段D Station テレビ放送は、日本では視聴することができなかった。在タイ時も、カンペンペット、ピサヌロークに滞在した二月半ばに、ホテルのテレビで数回視ただけに過ぎないが、その時は、番組らしい番組もなく、赤シャツ派の主張を何度も繰り返し放送するだけの単調で退屈な内容であった。）

赤シャツ派の組織 中核リーダーたち

赤シャツ派は地方で集会を開いたのち、3月26日にはバンコクのサナム・ルアン（王宮前広場）に集合し、夕方までには軍警の大警備の中、総理府前に移動し大集会を開始した。今回の集会は、数日で終わった従来の集会とは異なり、最終勝利を目指した長期戦覚悟の戦いである。大集会の中央舞台の壇上では、「中核リーダー」と言われるウィーラ、チャトゥボン、ナタウット、チャカポップ・ペンケー、ウェーンらが次々に演説した。3月27日からタクシンは、ドバイ等の遠隔地から、画像と音声を同時に伝達するビデオリンクという技術を用いて、赤シャツ派の集会に参加した民衆や、全国の家庭でD Station TVやコミュニティ・ラジオを視聴する人々に直接語りかけた。

ここでは、タクシンがビデオリンクで語った内容を見る前に、まず、赤シャツ派の組織とリーダーたちを見ておこう。

赤シャツ派は、公式には「反独裁民主国民連合戦線」(タイ語は Nor.Por.Chor.,英語は National United Front of Democracy Against Dictatorships 即ち UDD)と称している。タイのテレビニュースは、「赤シャツグループ Klum khon sua daeng」、もしくは「Nor.Por.Chor.」と呼んでいる。

この戦線派の前身は、2006年9月19日クーデターの後に、タクシン支持派および反軍事クーデターの考えをもつ政治家、市民活動家などによって開始された「独裁追放民主戦線」(タイ語は Nor.Por.Kor.,英語は Democratic Alliance Against Dictatorship 即ち DAAD)である。Nor.Por.Kor.は、2007年7月22日に、プレームのクーデター関与に抗議して、プレーム枢密院議長邸(シーサオ・テーウェートにある)を包囲し、警察の催涙ガスによる弾圧を受けた。更に2007年憲法の国民投票においては、反対票を投じる運動を展開した。しかし、8月19日の国民投票の結果、2007年憲法は承認された。その後の2007年8月23日に、Nor.Por.Kor.は「反独裁民主国民連合戦線」(Nor.Por.Chor.,UDD)と改名した。2007年12月23日の総選挙で、タクシン派のPPP党が勝利し、サマック政権が成立したので、一時活動を停止した。しかし、2008年5月末、同盟派(黄シャツ派)が、反政府集会を開始すると、活動を再開した。

赤シャツ派は(黄シャツ派も同様)、明確な成員、規約あるいは組織図などをもつ団体ではない。しかし、巨大な運動を展開するには、当然のことながら、運動の核に当たる指導部と運動サポート体制、それに運動の経費を支える資金源は不可欠である。赤シャツ派は、6-7人から成る中核リーダー(Kaen nam)と言われる、中央の演説舞台の常連弁士たちと、地方各地の運動のリーダーが存在する。地方のリーダーはタクシン派政党の現旧の地元代議士達、その系列の地方政治家・運動家、タクシン支持のコミュニティ・ラジオや地方新聞経営者などから成り、彼らはタクシン支持の住民を集めて地方レベルの集会を随時開催するとともに、バンコクでの大集会時には、民衆を動員(或いは雇って)し、貸切バスに乗せてバンコクに送り込んでいる。参加者の一部に、金で雇われた低所得者やホームレス(Khon Rai Ban)が加わっていることは間違いない。4月25日深夜のThai TBSテレビ局のニュース報道では、王宮前広場に住むホームレスが、赤シャツ派の集会に加われば、24時間で食事付400パーツの支給があった、集会が終わった今は再び失職した、と語っていた。赤シャツ派は、パタヤーに多数のタクシーを派遣したが、その際にはガソリン代1300パーツが支給されたという。

赤シャツ派の主要な運動は、バンコクにできるだけ多数の支持者を集めて、その数を誇示し、政府側に要求を認めさせようとする示威運動である。バンコクの大集会で主要な弁士として表に出る中核リーダーの背後には、彼らを指揮するタクシンおよびそのマシーン(旧タイラクタイ党や現 Phua Thai 党の幹部)がおり、中核リーダーはタクシンらと相談し、タクシンの最終判断を仰いで運動方針を決めている。

多数の人を集めるには、演説の役割が大きい。それ故、弁士の演説能力が重要である。赤シャツ派がバンコクで開く大集会は、国営テレビ放送 NBT(11チャンネル)の「今日の

「真実」番組の野外版として、2008年後半のサムック政権時代に始まった。黄シャツ派が、タクシン派サムック政権の退陣を要求して長期集会を続けるなか、それに対抗して開催されるようになったものである。それ故、テレビ番組「今日の真実」の常連出演者（ウィーラ、チャトゥボン、ナタウトら）が、「今日の真実」野外集会、即ち赤シャツ派のバンコク大集会でも中核リーダーとして横滑りした。彼らはいずれも南タイ出身で演説の名手である。

南タイのタイ人は議論好きで、演説が上手いというのが、タイ社会の固定観念である。この3名もその例に漏れない。但し、南タイは、話しの上手い民主党の政治家が国会議席の殆どを占めているが、この3名は北・東北タイに強いタクシンを支持し、南タイを主要地盤とする民主党と闘っている点で異色である。（彼らはタクシンを上手く騙して大金を手にしたのではと訝る者もいるが）

赤シャツ派の中核リーダーには、上記の「今日の真実」番組の常連から横滑りしたタクシン派演説家たちの他に、民主主義を擁護し軍事クーデターに反対する市民活動家リーダーであるウェーン・トーチャカーン医師やジャラン・ディターアピチャイ（ランシット大学元講師）らも存在する。この二人は、1970年代にタイ共産党に入党し、武力闘争の経験がある。70年代に学生運動に加わった経験を有する「10月の人」もしくは「10月世代」と言われる人々の一部、および1992年5月にスチンダー大将（軍人出身で選挙の洗礼を受けていない）の首相就任に反対して政権打倒運動に加わった人々の一部などが、後者の基盤である。

元タイ共産党の活動家を中心にして、今年の3月29日にはタイ国社会党の設立が発起された。これは、タイ共産党の復活とも、赤シャツ派の別働隊とも評されている。

タクシン派の代議士や閣僚には、後述するように1976年10月6日事件前後にタイ国共産党の武力闘争に参加した人物も少ない。それ故、タクシンと元共産党活動家との組み合わせは珍しくはない。（この辺りが、反タクシンの指導者から、タクシンは一党独裁政治の共和制国家を計画したという事実無根？の批判を受ける理由であろう。）しかし、彼らの大部分は既に共産主義者ではなく、共産主義の理念とは無縁の生き方をしている。その中であって、比較的イデオロギー性が強く市民運動を継続してきたウェーン医師やジャランらが、赤シャツ派の中核リーダーの一角を占めている。これについては、社会改革の理念を堅持する元共産主義者たちが、タクシン派の運動を利用して宣伝活動をしているとも、逆に、タクシン派が社会改革派と協力して勢力拡大を図っているとも見られる。既存支配体制を打破し、社会経済改革を実施すべきという、タクシンの今回のビデオリンク演説のトーンは、元共産主義者たちの影響の現れと見ることもできるかもしれない。とにかく、タクシン派と元共産党活動家が今のところ相性がよいのは、共にタイ社会の多数派である低所得階層を基盤にして共通の敵と戦っているからであろう。

赤シャツ派の中核リーダーとして、常に演説に登場する人物を、タクシン直系の「今日の真実」系と、反軍事独裁・民主主義擁護・社会改革派の2系統に分けて紹介して置きた

い。

前者の中心人物、ウィーラ・ムシカポンは本誌1月号でも紹介したので、ここでは前者としては、チャトゥボン、ナタウット、後者としてはウェーン医師、ジャランの経歴を紹介しよう。

チャトゥボン・プロムパンは、1965年10月スラタニー県生の43歳。76年9月19日にタノーム元帥が国外から帰国し、バンコクの名刹ワット・ポーウォン寺で出家した際（この帰国は、76年10月6日事件の発端となった）同元帥の出家を手配した僧侶ラベープ師（現在は同寺副住職の一人、80年代にはカトリックがタイを乗っ取る計画をもっていること？を暴露する本を書いた著名僧侶）の異母弟である。ラームカムヘーン大卒後、チュラーロンコーン大学修士修了。92年5月事件で、民主記念塔周辺の反軍事政権集会が弾圧された際、ラームカムヘーン大に移動して反軍部の集会を継続した指導者として名を挙げた。タイラクタイ党創立に参加。9月19日クーデター後、独裁追放民主戦線のリーダーの一人、07年12月23日の総選挙でバンコク比例選挙区から当選。

2009年4月8日の赤シャツ派バンコク大集会の朝、テレビニュースは、チャトゥボンの母の様子を次のように伝えた。スラタニー県ナーサーンに住む、90歳になるという母親は、末子であるチャトゥボンの身を案じて彼の携帯に何度も電話をしているが、チャトゥボンが電源を切ってしまっているので通話できないと嘆いている。母の家には、抗議のデモ隊が押掛けている、と。

ナタウット・サーイクアは、1975年6月ナコンシータマラート県シーチョン郡生で、風貌よりは若く、33歳に過ぎない。出身地の高校生時代にディベートで名声をあげた。98年にバンコクの私立大学トラキットバンディット大学卒業、2005年にはNIDAで修士号を取得。ウィーラ・ムシカポンとともにテレビ番組制作会社を立ち上げた。06年4月の総選挙で、タイラクタイ党所属で当選したが、07年末の総選挙では落選した。08年2月サマック政権の総理府副スポークスマン、08年9月にはソムチャーイ政権の総理府スポークスマンに任じられた。赤シャツの攻勢が強まった2009年4月9日朝のテレビニュースに、ナタウットの中高校時代の恩師が登場して、「ナタウットに能力があることは誰もが認めるが、今やっている目上の人を攻撃するようなことを、彼が卒業した学校の教師は誰一人として是認できない」と語った。

赤シャツ派中核リーダー中の元タイ共産黨員

ウェーン・トーチラカーン医師には98～99年に、カセサート大学近くの彼のクリニックを訪ね、数度インタビューしたことがある。その話を以下紹介しよう。

彼は1951年にバンコクのサートン路で生まれた。彼の中学時代に亡くなった父は戦前に潮州からバンコクに来て、人糞の汲み取り人夫から身を起し商売で中流に上昇した。母は3歳の時に中国から来て、中国語タイ語ともに読めず、足は纏足で小さかった。少年時代の彼は、ピブーンの排華政策に完全に洗脳されて、中国人であることに引け目を感じ

ていたので、中国の事象には無関心であった。5歳で小学校に入り、16歳で名門トリナムウドム高校を卒業し、直ちにマヒドン大学の医学部に入学。74年に6年生を卒業した。医学部を選んだのは、父親が病で早世したからである。

71年のタノームのクーデター以後、学生の軍事政権批判が強まり、社会主義傾向も出てきた。この少し前からタマサートの学生たち（後述のジャランの外、フリーディー・ブンスー、セクサンら）は安価な学生新聞を作ってマヒドン大学の正門前でも販売し始めた。彼らと仲間になり政治学、社会主義の勉強会を実施した。73年10月14日事件当時は、マヒドン大学学生自治会長兼タイ国医学生団体の書記長であり、医学生、獣医師、看護学生を率いて、逮捕された学生の釈放を求めるデモを行った。10月14日事件以後は農民や労働者の集会が頻発した。その集会に医学生や医師を派遣して農民労働者を診察した。74年に入ると学生活動家の暗殺が始まった。

75年に暗殺を逃れるため、セクサン、フリーディー、労働指導者のテートプーム・チャイディー（現在は黄シャツ派の活動家）らと共に、フランスに逃げ、パリの中国大使館にタイ共産党と連絡を依頼した。連絡が取れるまで3ヶ月を要した。その後北京に行き、毛沢東思想を2ヶ月間学習したのち、南北統一直後のベトナムで3ヶ月間を過ごした。76年に北タイ・ナーン県のタイ共産党の根拠地に入った。この時点では未だ共産党入党を認められていなかった。77年に東北タイの共産党根拠地に医学校を作る責任者として派遣され、82年に投降するまで東北タイに留まった。92年5月事件では、91年2月クーデターの指導者スチンダー大將が首相に就任したことに抗議して、プラティーブ・ウンソントム・ハタ（彼女は今回の赤シャツ派の闘争にもリーダーの一人として参加）が、妊娠3-4ヶ月にも拘らず、ハンストを始めたのに刺激されて、運動に参加することになった。

共産党世代の次世代は、日本のポップカルチャーの影響にどっぷり浸かったようである。タイ国共産党の理論的指導者として1970年代半ばの大学生に圧倒的影響力があったアヌット・アーパーピロム氏（1940年生）を、99年8月に自宅に訪ねたところ、子どもが日本製のゲームばかりして、と嘆いていたが、ウェーンのむすめもチュラーロンコーン大学の日本語学科に学び、優秀な成績で卒業後、現在は日本に留学して源氏物語を研究しているという。インタビュー時には、ウェーンも自分の世代は親の言うことは絶対であったが、次世代は親の言うことを聞かないと嘆いていた。

ジャラン・ディターアピチャイは、1947年に南タイ、パッタランに生まれた。同地の高校を卒業後、67年から4年間タマサート大学政治学部にて在学し、卒業した。大学入学直後から、様々な思想書を乱読するが、バンコクで地下活動していたタイ共産党員ソンプン・ユナロンの影響下で共産党に接近。しかし正規の党員として認められたのは73年の10月14日事件以後である。それでも、70年代の大学生の活動家としては、タイ共産党入党した最初の世代であり、以後、バンコクでの地下活動に従事し、76年10月6日の弾圧以後はナーン県の根拠地に移動した。タイ共産党が1982年に開催した最後

の党大会（第4回党大会）では中央委員会に次ぐ地区委員会（数県で構成）の委員に選出されたが、間もなく投降した。その後、フランスのパリ第7大学に留学し、歴史の修士号取得。1990年から10年間ランシット大学の講師、2001年から07年9月26日まで国の人権委員会委員。06年9月クーデター後、「独裁追放民主戦線」のリーダーの一人として軍事クーデターを批判したため、クーデター勢力が任じた任命議会によって人権委員会委員の職を解任された。彼は色黒で、いかにも南タイの地着きの人といった風貌である。15年ほど前、彼が大学講師時代に、日本の学術振興会の支援を得て日本の社会主義政党的の対外政策について研究のため来日した際に、筆者があなたは中国系ではないでしょう、と尋ねたところ、いや自分も中国人の子孫だと語っていた。

3月22日タクシン、スラユット枢密院議員と司法トップの陰謀を暴露

タクシンは、ビデオリンクを3月27日に開始したが、それに先立つ、3月22日（日）チェンマイでの赤シャツ派の集会に、Phone-inして、枢密院議員スラユット大将が、クーデター陰謀に当初から加担していたことを、次のように暴露した。

2005年2月6日の総選挙で500議席中タイラクタイ党が375議席（民主党は96議席）を得て圧勝したのち、某枢密院議員が、ある新聞紙の所有者に、王室はタクシンを嫌っており、タクシン首相を辞めさせたがっていると語った。ここから、その新聞の私（タクシン）叩きが始まった。私は、この話を同新聞所有者の息子から聞いた。更に、私が亡命した後、中国まで私に会いに来たパンロップ・ピンマニー大将（1936年5月生、元国内治安維持司令部副部長）から次の話しを聞いた。

即ち、パンロップはスラユット枢密院議員とスクムウットのピー・マーラークン宅で会ったが、そこで、パンロップに、スラユットが、「他の二人の枢密院議員とともに901（国王のコードネーム）に謁見し、タクシンは国王に不忠なので、国王のために何とかしたいと申上げた」と告白した、と。

しかし、国王は政治を超えた存在なのでこのような話はある得ない。スラユットは私を陥れるためにパンロップに架空の話をしたのだろう。その後、私は何度か暗殺されそうになった。どうしてスラユットは私に怒っているのだろう。それは私が、彼が2002年5月に無断でミャンマー軍を攻撃したことを咎めて、彼を陸軍司令官（1998年10月チュアン民主党首が首相兼国防相時に任命）から（2002年10月に）国軍最高司令官に棚上げしたからであろう。ピー・マーラークンの家にタクシン打倒の謀議のために集まった者は、パンロップによれば、スラユット大将の他に、アカラートン・チュラーラット最高行政裁判所長官、チャーンチャイ・リキットチッタ最高裁長官、チャラン・パクディータークン最高裁長官秘書官、プラーモート・ナーコンタップである。

タクシンの暴露後、ピー・マーラークンが、会食はしたが謀議などではなかったとして記者に語ったところでは、彼が自宅にスラユット、パンロップや司法高官等を招いたのは、06年5月6日のことである。なお、この直前の、06年4月25日に、最高行政裁判所

長官アカラートーン・チュラーラットは、同裁判所新任判事の国王面前での就任宣誓式のために、ファヒン離宮を訪ね、新任判事らとともに国王に謁見した。その場で国王が下された、「国家の混乱に際し、三権のうち行政、立法の二権には解決能力がないので、残る司法権により解決を図れ」というお言葉は、当時テレビの王室ニュース時に放送されたので有名である。

タクシンによる暴露後、スラユットはそのような事実は存在しないと陰謀計画の存在を否定し、タクシンは因果応報の報いを受けるだろうと語った。

タクシン打倒の陰謀計画に最初から加担したというパンロップ自身が、タクシンに上記の極秘情報を打ち明けたのである。常識では理解し難い行動である。何の目的で、パンロップがタクシンに打ち明けたのかは検討を要しよう。テレビ解説では、一応、パンロップはクーデター成功後、期待したようなポストを与えられなかったからだと説明されてはいるが。

パンロップは当然、赤シャツ派の壇上に立つものと予想されたが、結局最後まで集会に加わらなかった。その理由を、パンロップは、4月15日になって次のように語った。「ウィーラ、ナタウット、チャトゥポンの3人のリーダーには、きちんとした戦略がなく戦えないので加わらなかったまでだ。今回の騒乱はバンコク都民に迷惑をかけたので、都民の支持を得られなかった。(1992年の)5月事件とは大違いである」と。

ここで、パンロップがタクシン降ろしの発起共謀者として名を挙げた人物の経歴を見ておこう。

ピー・マーラークン(・ナ・アユッタヤー)は、王族の末裔で、1937年9月生。イギリスの大学卒業後、バンコク銀行勤務。市場の拡大し始めた出版事業に目を付け、73年5月から2年間、月刊英文雑誌 Who's Who in Thailand を発刊した。同誌はタイ研究を始めたばかりの筆者には、大変有益な情報が多かった。次いで日刊プラチャーティパタイ紙編集責任者(同紙は70年代半ばの時代風潮を反映して左翼的な記事が多かった。筆者は同紙記事等を利用してタイの農民運動の論文を書いたことがある。彼の前の同紙編集責任者はソンティ・リムトーンクンである)その後現在まで続く女性誌『ディチャン』などの出版事業。現在、ニュース番組製作会社 Pacific Corporation 会長でもある。外にも、テレビ放送経営にも従事したことがある。マスコミ界の有力者で、マスコミ界に通じていることから、王室 PR 上の役割も大きいと思われる。

アカラートーン・チュラーラット最高行政裁判所長官は1940年生、2000年に同裁判所長官。06年9月クーデターの後、首相候補の一人。その後憲法裁判所副長官としてタイラクタイ党解党判決を出した。

チャーンチャイ・リキットチッタ最高裁長官は、1946年4月生、2005年10月から一年間最高裁長官、06年9月クーデター後、首相候補の一人と目されるが、スラユットが首相に任じられたため、スラユット内閣の法相に就任した。08年8月16日に枢密院議員に任命された。

チャラン・パクディータナークン最高裁長官秘書官は、1950年2月生、ケンブリッジ大卒、イギリスのバリスター資格取得。クーデター後の06年10月から法務省次官、07年憲法起草委員、08年5月16日上院により憲法裁判所判事に選出された。

プラーモート・ナーコンタップは、元タマサート大学教師で、73年10月14日事件当時には民主派のリーダーの一人であった。タクシンが、1999年にフィンランドで元タイ共産党員と謀議して、王制を制限して一党独裁政治を実現し、最終的にはタイを共産化するという計画を立てた（「フィンランド計画」）というデマを、2006年5月17-24日にソンティが経営する『ブーチャトカーン』紙に書いた。筆者が、彼と数度話した印象では、現実よりもどちらかという空想の世界に生きている御仁という感じである。

3月27日タクシンのビデオリンク演説：君側の奸、ブレーム、スラユットを非難

3月27日20時30分から75分間、タクシンは赤シャツ派の大聴衆に初めてビデオリンクで演説した。際限ない争い事をやめ、出口を提案したいとして次のように述べた。

先ず、彼はタイの司法制度が（ダブル・スタンダードのため）海外の投資家に信用されなくなり、タイは折角のチャンスをみすみす失っていることを取り上げ、その例として、彼の仲間のタイ人ビジネスマンの話しとして次のように紹介した。日本のビジネスマンたちは、現在タイに生じていることは、歴史上例を見ない事態であり、何が起るか判らないので、今後のタイへの投資を止めた。日本の航空機産業は、長らくアメリカから制限されてきたが、現在その制約もとれたので、自ら航空機産業を再興することになったが、そのための部品工場をベトナムに建設している。タイは古くからの日本の友好国なのに、日本からの投資が遠のき、惜しい機会を失っている、と。

その後、タクシンは次のように語った。

タイでクーデターが繰り返され民主主義が発展しないのは、有力者に遠慮して真実を語らないからである。今日は真実を語りたい。一部は、3月22日にチェンマイのPhone-inで話した内容と重複するが、2005年（2月6日）の総選挙でタイラクタイが大勝したのち、野党民主党に比し与党が強すぎるという批判が生じた。05年末（11月）からソンティがルンピニー公園を会場に反タクシンの週末演説会を開始したが、これはアピラック民主党都知事から全面的便宜供与を受けていた。ソンティの反タクシン集会には、常に民主党の影がちらついた。しかも、枢密院議員の何人かが、国王の名を密にかたって、メディアに国王がタクシンは困ると仰せられていると触れて回った。このため、役人の中には政府の命令を従わない者、働かない「ギア・ワーン」の者が出てきた。それで私は（2006年7月初に）総理府に役人を集めて働くように求め、「憲法の埒外にいる有力者（Phu mi Barami nok Ratthathanun）がラインの指令とは別に役人に介入していると批判した。これを聞いてソンティは、私の発言は国王を指していると批判した。この時、私は遠慮して、それが誰を指しているかを明言しなかった。今、ここに明かにするが、それはブレーム枢密院議長（1920年8月26年生、78年10月1日 - 81年8月28日陸軍

司令官、80年3月3日 88年8月3日首相、88年8月23日枢密院議員任命、88年8月29日国王より元老のタイトルを与えられる。98年8月4日～枢密院議長)のことだ。この後、ブレイムはスラユット・チュラーノン(1943年8月28日生、98年10月1日 2002年9月30日陸軍司令官、02年10月1日 03年9月30日国軍最高司令官、03年11月枢密院議員、06年10月1日 08年1月29日首相、08年4月8日～再度枢密院議員)を伴って、陸海空軍の制服を着て、軍隊の各士官学校を行脚し、私を非難して回った。

2004年1月20日に枢密院の建物(旧外務省の建物を改装使用、19名に上る枢密院議員のオフィス)開きの際、国王は、枢密院議員の任務は国王への助言であり、その人への助言は枢密院議員としての仕事ではないと注意されている。国王は高い地位におられ、政治に関与されることはない。しかし、ブレイムやスラユットら一部の枢密院議員が政治に係わると、背後に国王がおられるが如く誤解が生じ、王制がダメージを受ける。ブレイムは、一回も選挙の洗礼を受けることなく(1980年3月から88年8月まで)8年間首相の地位にあったが、彼の政権を支えたのが民主党である。1986年(7月27日)の総選挙で民主党は100議席を得て第一党となったにも拘らず、党首のピチャイ・ラッタクンは首相にならず、ブレイムに首相の地位を譲った。このような経緯から、ブレイムは政治に関与すべきではない枢密院議員であるにも拘らず、民主党への思い入れが強い。しかし、タイラクタイ党の大勝で、民主党政権のチャンスはなかった。そこで(2006年5月6日の)ピー・マラークン宅でのスラユットとパンロップとの会話となるのだ。

そこでスラユットはパンロップに、次のように話したという。「スラユット本人、ブレイムおよびもう一人、計3名の枢密院議員が、901(国王のコードネーム)に謁見して、タクシンは国王に不忠なので処分したいと奏上した」と。この話は、ピー宅に集まった他の4名にも伝えられた。ここから国王の御意志とは無関係に、しかし恰も国王の御意志の如く、タクシン降ろしの話が進行し、今日の混乱の原因を作った。それに、ブレイムは9月19日クーデターの際、恰も自分がクーデターの長の如く軍司令官たちに付き添って国王に謁見したが、こんなことは枢密院議員の任務だろうか。またスラユットが首相になった時は、チャーチルのようにと誉め、アピシットには「あなたのような人が首相になって、タイ国は幸運だ」と誉めた。これは政治的に中立でなければならぬ枢密院議長が、政治介入していることを示している。ブレイムが「憲法の埒外にいる有力者」として、様々なボタンを押しまくり、命令して回ったので、国内の手続きは混乱し、不公正と二重基準(ダブル・スタンダード)を生んだのだ。タイを国際的に認められる民主主義にするために、タイ人の子孫のために、パー・ブレイムは政治介入を止めて欲しい。

一方、スラユットがメディアに熱心に働きかけたことは、ソンティ・リムトーンクンが(2007年8月20日に)ヴァージニアで次のように講演したことから明かである。即ち、スラユットはソンティに激励の電話をして、「もう少し頑張れ。タクシン降ろしに成

功し、自分（スラユット）が首相になった暁には、テレビ局一局の権利を与える」と。

次の事例も、スラユットが執拗に私を降ろそうとしたことを示している。即ち、私が未だ首相であるにも拘らず、私の副首相の一人が、私の知り合いのビジネスマンたちに閣僚ポストの話を持ちかけたのだ。この変わり者の副首相はスラユットに呼ばれて、憲法第7条（憲法に規定がない場合は、国王を元首とする民主主義統治の伝統に従って判断する）を適用して首相にしてやると言われたために、喜んで閣僚人事の準備をしていたのだ。これを知った私は、この副首相を詰問したところ、同副首相は慌てていた。（2006年5月8日に、憲法裁判所が同年4月2日の総選挙は無効であり、中央選挙管理委員会の行為は憲法違反であるという判決を出したのち）中央選挙管理委員会会長チャールパット・ルワンスワン大将に（2006年5月15日付けで）会長辞任の辞表提出を強制したのも、スラユットである。スラユットはチャムローン・シームアンとともに、チャールパットに会って、辞任しろ、しなければ刑務所行きになるぞと脅した。チャールパットが辞表を書く前に、私は枢密院の建物にスラユットを訪ね、男らしく兄弟のようなつもりで話したいと言って「ピー（兄貴）、どうしてこんなことをするのだ」と抗議した。スラユットは、「ピーは何もしらない。これからゴルフに行くところだ、邪魔をするな」と取り合わなかった。しかし、車寄せまで見送りには来てくれた。本当に下らない話ばかりだ。しかし、枢密院議員は国王・王妃に近いところにいるので、彼らが何か言えば国王の御意志とタイ人は理解して従う。私は6年間首相を務めた経験から、国王も王妃も政治には関与されることはないことをよく知っている。多数いる枢密院議員の中でも、積極的に政治に関与しているのは、プレームとスラユットの二人だけに過ぎない。スラユットは、前回の私のPhone-in後、私は因果応報の報いを受けるだろうと言ったそうだが、私も出家したことがあり、因果応報は十分に知っている。

ピー宅での私を降ろす会議の後、私に対する暗殺未遂が4回生じた。2回は銃撃で、2回は爆破である。この背後にいたのは、ナーイ・バン（当時陸軍司令官であったソンティ大将？）である。

2006年4月2日の総選挙を民主党はボイコットした。その後、総選挙を違法とする訴訟が続いた。選挙をボイコットした民主党は、何のお咎めも受けず、却ってクーデター後、クーデター勢力が任じた憲法裁判所によってタイラクタイ党が解党された。私は、妻が不良債務回収のため売りに出された土地を8億バーツほどの正当な価額で購入する際に、（民商法の規定に従い）配偶者の義務としてサインしただけで二年間の刑を受けたが、一方、スラユットは家屋などを建設することはできない保安林カーオヤイの山頂付近の土地をただで取得し、別荘を建てているのに、何のお咎めも受けていない。おかしい話ではないか。司法は、サマック首相を、料理番組出演を理由に失格させたが、全く国際的笑い話だ。

このような二重基準は、タイの国際イメージ、タイの王制を大きく傷つけている。もし司法官が、御名をかたった命令を受けた場合は、それなら一緒に国王に謁見して確かめた

いと答えよ。タイは立憲君主制だから、国王がそのような命令をされるはずはないのだ。ただ、その周りの者たちが、私益のためにいろいろ御名をかたっているに過ぎないのだ。また、政治家の刑事事件を最高裁だけの一審制にしているが、これは国際的に認められない制度である。しかも、挙証責任を被告側に課しているが、これは現代の刑事訴訟法の原則に反する。

昨年11月のスワナブーム空港閉鎖は、黄シャツ派が単独でできるはずはなく、実際は軍がやったものである。軍は銃器まで、もたせた多数の兵士に黄シャツを着せて集会に参加させていた。また、軍は現在、国内治安維持司令部に10億バーツの予算を配分して、赤シャツ派の農民を対象に洗脳宣伝を行っているという。軍が農民の思想をコントロールできるなどと考えるのは時代遅れである。友のアイ・ポック（アヌボン陸軍司令官のニックネーム、アヌボンとタクシンは共に幼年学校第10期生で同期生）よ！軍の政治関与を止めよ。王制を政治利用することを止めよ。王制を政治利用すれば、王制が傷つく。軍は、南タイの治安維持などに努めておればよいのだ。国王のために仕事をしている人々も王制を政治利用することを止めよ。私は、仕事気遣いで、全て国、人民、国王のために働いたのだ。私が王制を倒すことなど毛頭も考える筈がない。それは私を陥れるための口実に過ぎない。

公民権を停止されている116名の旧タイラクタイ党執行部や旧PPP党執行部は、全員赤シャツ派の壇上に姿を現す時である。真の民主主義を取り戻すまで、正義を取り戻すまで、二重基準の廃止まで、枢密院など一切の機関の政治関与がなくなるまで、力を合わせなければならない。9月19日クーデターが全ての元凶である。今の際限のない訴訟合戦と復讐合戦とを全て止め、経済発展の前提となる政治の安定のため、2006年4月2日総選挙以前に立ち戻って、全てを新しく再出発することを求める。

そのために、国会を解散して国民自身に決定させよ。その後、強力な首相の下で安定した政治を求めた1997年憲法に戻れ。アーナン・パンヤーラチュン（元首相、1932年8月生）は1997年憲法起草の中心者であったのに、この憲法を擁護せず、この憲法で首相になった私を批判している。おかしな話だ。97年憲法の一部を手直して公布せよ。自分は立候補するつもりはないので、民主党は心配しなくてよい。しかし、政治家の人材不足が露呈しているので、公民権を奪われた政治家たちの権利回復は必要である。

要求実現まで闘うと言いながらも、タクシンが出した提案は、国会解散、総選挙、1997年憲法を基礎としての改憲、公民権停止者の恩赦という、比較的穏健な提案であった。また、彼は、ブレイム、スラユットなど少数の枢密院議員を、言わば君側の奸として強く糾弾し、また、枢密院議員、軍部、司法の非民主的な支援を得て成立した民主党内閣を批判したが、国王、王妃の政治関与はありえないと言明して、王室への敬意を忘れなかった。

このタクシンビデオリンク放送後、Nation TVのキャスターは、驚嘆したように、スラユットについて次のように語った。スラユット大將は、9月19日クーデター後、首相は

やりたくない、しかし国家の危急時であるため、やむを得ず引き受けざるを得ないのだという態度であったが、もしそれらは全て演技で、本当はクーデター計画に最初から関わり、首相の座を手にしたということが事実なら、大した演技力だ！

「お上の政治」(アマターヤティパタイ) 批判

タクシンは3月27日の最初のビデオリンクののち、翌28日は経済問題の解決をテーマとしたビデオリンクを行った。29日は、長い療養ののち病死した長姉の葬儀の日なので、タクシンはビデオリンクをしなかった。その後、30日、31日と、ビデオリンクが続いた。筆者はバンコクに滞在していた31日夜まで、タクシー運転手コミュニティ・ラジオ局が中継したビデオリンクをフルに聴くことができた。28日、30日、31日のタクシン演説で耳につくようになったのは、初日の27日には全く使わなかった「アマート (Ammat)」、「アマターヤティパタイ (Ammatayathipatai)」、「お上の政治」という語彙である。

この語は、2008年7月くらいから、赤シャツ派の集会で、比較的過激な弁士が使用してきた単語である。例えば、08年7月18日のサナム・ルアンでの演説内容が不敬罪に当たると告発されたダーオ・トーピドウ(45歳女性、元新聞記者、魚雷の如く激しく演説するのでこのニックネームがついた)の同日の演説を、YouTubeで聞くと、彼女の主張は、「アマート」(高官)と既存の資本家グループが結託してタクシンを政権から追放した、1932年立憲革命のフリーディーの理念に立ち戻れという内容である。09年2月9日にRed Siam Manifestoを宣言して、イギリスに逃れたチュラーロンコーン大学政治学部准教授チャイ・ウンパーコン(1953年10月生、タイ・英二重国籍、SOAS 修士後在英、97年チュラーロンコーン大学政治学部に就職)の主張は、ダーオ・トーピドウに比し、より根源的で、より過激だが、似たところもある。

因みに、アマートの最たるものとして批判されている枢密院は、1932年立憲革命後王族の政治関与を排除した32年、46年憲法では存在しなかった。47年11月9日フリーディー派政権を倒した軍事クーデター後の憲法で、初めて国王の助言者5名(元老、アピラッタモントリーと称した)が設けられ、続いて保守回帰した49年憲法で初めて枢密院制度(同憲法では、国王が選任する議長1名、議員8名以内)が生まれた。今日の枢密院制度の起源である。

2008年を通して、NBT TVの「今日の真実」番組でウィーラ以下の弁士たちが、「アマート」や「アマターヤティパタイ」(「お上の政治」)という語を使用するのを筆者は聞いた記憶がない。ところが、3月28日からタクシンの演説も赤シャツ派の弁士たちも、彼らが求める真の民主主義と対比して、タイの政治体制の現状は「アマターヤティパタイ」(「お上の政治」)である、タイ政治は「アマート」(高官)によって牛耳られている。これを根本的に変革しなければならない、と繰り返すようになった。

例えば、3月31日のビデオリンクでタクシンは、次のように演説した。

私（タクシン）をタイに革命を起そうとしていると批判をする者もいるが、私が求めているのは革命ではなく真の民主主義だ。現在のような「アマーターヤティパタイ」型の民主主義ではない、十全な民主主義だ。それは人民による人民のための政治だ。アマート、経済的階級の有力者グループ（klum phu mi itthipon chonchan thang setthakit）、あるいはバンコクで利権を漁る政治家の利益のための政治ではないものだ。国民は全員平等な権利をもち、法の前では全員平等でなければならず二重基準があってはならない。

「アマーターヤティパタイ」とは、「アマート」（高官）と「ティパタイ」（主権）を組み合わせたものである。アマートは、1932年前の絶対王制時代に、国王からタイトルを与えられた高等官の意味で使用された。その後1966年に、アメリカ人政治学者 Fred W. Riggs が、1960年代初期のサリット独裁政治体制を Bureaucratic polity(官僚支配体制)としてモデル化し、このモデルでサリット時代のみならず、それ以前および以降のタイの政治体制までも説明した。実は、このモデルは軍事独裁期であるサリット時代の説明には、ある程度有効ではあっても、これでそれ以前・以後の政治体制までを説明するのは無理がある。しかし、この説は、タイ人政治学者たちには結構受け入れられた。それは彼等が、タイの歴史的事実に無頓着であるためであろう。（タイの高等教育を受けた優秀な学生たちも、自国の近現代史について知識が乏しいことは、筆者が日々実感しているところである）。兎に角、この Bureaucratic polity がタイ語訳された際、「アマーターヤティパタイ」という訳語が与えられた。

しかし、タクシンらが用いた意味は、これよりも広い。彼らに言わせれば、プルーム、スラユットらの枢密院議員、アヌポン陸軍司令官ら軍の幹部、司法高官、アピシット民主党など、人民を基盤としない高官たちが、既成の大財閥と結託して、二重基準を用いて権力を獲得・維持し、下々の貧しい民衆の利益を顧みないのが、「お上の政治」体制である。

タクシンは、自らが財閥であり、首相時代には様々の手段を使って政治権力を不当に集中するとともに、自己の経済的利益をがむしゃらに追求して、それで多くのファンを失った。そんなことは、全く記憶にないかの如く、彼は「二度とは軍事クーデターが生じない政治体制への変革」、「人民の人民による人民のための政治」、貧者の利益に叶う政治を繰り返した。しかし、タクシンは根本的な改革と述べながらも、彼が具体的に提起した処方箋は、国会解散、総選挙、一部改憲に過ぎず、それにより、タクシン首相時代の「人民が最も幸せであった時代」に戻ること、言ってしまうと、自分の権力回復を求めたに過ぎなかった。彼は、27日のビデオリンクでは、自分は選挙には出ないと語ったが、28、30日には国民が求めるなら、自分は首相の座に戻る準備があると訴えた。

彼は、要求実現のため、タクシン時代に経済的利益を受けた者は全員赤シャツ派の集会に参加せよと呼掛けた。その中には、下級兵士や警官も含まれている。彼の呼掛けは相当の効果があったようで、赤シャツ派の集会場周辺を警備している警官が、警備当番を終わってのち、制服を脱ぎ、赤シャツ隊から貰った赤シャツに着替える様子をテレビニュースは何度か放映した。警備当番中の警官でさえ、偏向報道？をする新聞やテレビの記者に対

して、赤シャツの立場に立ってくっついてかかる者もいたという。

更に、タクシンは30日のビデオリンクの冒頭、「もし銃声が響き、軍が人民を銃撃した時には、私は直ちに人民を率いてバンコクに入る。私は、現在のような独裁政治を今後は認めない」と大見得を切った。(実際には後述のようにバンコクに銃声が響いても、タクシンは姿を現さなかったが)

タクシン自身の「アマーターヤティパタイ」批判は、今回の闘争勝利のために、俄か仕込みの理論的武装に過ぎないと思われる。しかし、彼が自らを政権から追放した権力と闘おうとすれば、下積みの民衆(グラスルーツ)を基盤とするしかなく、グラスルーツにアピールするためには、赤シャツ派中の左派勢力、過激派の理論を借りる外なかったことも事実である。大衆的人気者のタクシンが、下積みの民衆に体制批判の火を付けた影響は、今後思わぬ副作用をもたらすかも知れない。

タクシンのビデオリンクが数回続いた後の3月末、筆者がタクシーの運転手達と話したところでは、タクシン支持派ではなく中立だという運転手たち(チャチョンサオ、バンコク、およびスリンのスイ族出身の各一人の計3名。因みに、バンコクのタクシー運転手中、東北タイ出身の運転手の多くは熱烈なタクシン支持派であるが、それ以外の地方出身の運転手は中立か、タクシン批判派の方が多い)が、アピシット内閣はその生い立ちが正しくないと言ったことは、印象に残った。彼等の見解は、筆者には、タクシンのビデオリンク演説の効果のように思われた。

これについては、3月30日のビデオリンクで、タクシン自らが、「タクシンの言うこともアピシットの言うことも信じられないが、二重基準が存在していることだけは間違いはない」という庶民の声を紹介した。タクシン支持からではなく、二重基準の不正義に怒って、赤シャツ派に参加している人もいるはずである。筆者が5月に入って話したタクシー運転手たちの中には、道路を閉鎖するような赤シャツ派には賛成できない、政治には関係せず仕事だけをしている、騒動中は、市外を流していた、という人達も少なくなかった。彼らも話しているうちに、二重基準(サマックが料理番組に出ただけで首相失格になったとか、民主党内閣の空港閉鎖をした黄シャツに対する処罰は一向に進んでいないとか)批判には、熱がこもってきた。

3月29日夕刻、筆者は総理府前の赤シャツ派の会場を訪ねた。赤シャツ派中核リーダーたちが演説する主舞台近くに至るまで、屋台の物売りが長蛇の列をなしていた。赤いシャツか赤いスカーフの人ばかりかと思いきや、主舞台近くでも赤シャツではない人も10人に一人くらいはいた。白っぽい服の筆者も、なんら咎められることもなく、東京の満員電車に近い人混みをかき分けて主舞台近くまで入ることができた。主舞台は、総理府敷地外にあり、ピサヌローク路とナコンパトム路の交差点上に設置されていた。主舞台のバック・スクリーンには、タイ語で「全国の赤シャツ派の力を結集しよう」、英語で“Red in the Land”と大書されている。赤シャツ派は約束通り、総理府敷地内には立ち入らなかった。総理府敷地内は警察、軍隊が警備しており、人気は少なく、赤シャツの民衆で混み合う困い

の外とは対象的であった。主舞台前はあまりに混み合っているのに、会場の周辺に出て観察すると、会場周辺にはテントが張られ、飲料水のボトルや弁当の無料配布が行われていた。これは黄シャツ派が総理府を占拠した時と同様である。総理府敷地の鉄製の囲いには、いくつか壁新聞的な訴えが貼られており、地方官憲の不当な扱いに対する告発やタイの階級社会の現状打破を訴えたものもあった。社会の下積みの人々が、赤シャツの支持者であることを、あらためて印象付けた。このような印象とちぐはぐで、意外であったことは、主舞台の裏からワット・ベンチャ（マール寺院）まで、ナコンパトム路上に自家用車が延々と駐車しており、それが途切れた所から主舞台近くまで多数の乗り合いオートバイが営業していたことである。

タクシンとカシット外相

3月30日のビデオリンクで、タクシンはカシット・ピロム外相（1944年12月15日生）を徹底的にこき下ろして、次のように語った。

空港を占拠した前歴のある国際テロリスト、カシットは、私のタイ国旅券を停止するとやっているが、やりたければやるがいい。1000パーツの旅券などいつでも返してやる。しかし、私からタイ人の心は奪うことはできない。

カシットと最初会ったのは、私が外相としてジャカルタのAPEC会議に出席した時である。その時、カシットはインドネシア大使（1994 - 1996年）であった。私はどこに行っても、大使に世話になった場合は、大使に金銭面で困らせないようにカネを与えている。私がバンハーン内閣の副首相時代に、カシットは私に、かつてチュアン・リークパイ（1938年7月28日生、1992年9月 - 95年7月及び97年11月 - 2001年2月首相）が商務大臣時代（1981年？）と一緒に仕事をしたが、チュアンは仕事ができず、決断すべきことも決断しないと話した。その時、おかしいことを言う人だ、かつての上司の悪口を言うような人物は使うべきではないと思った。以来、彼を意図的に使おうとしたことはない。私が首相になる前に、ドイツを訪問したが、その時にカシットは駐独大使（1997 - 2001年）であり私を出迎えた。この時もカネを与えた。私が首相になると、カシットは私をよく知っており仕事を手伝ったことがあるので、首相の手伝いをしたいと本省に言ってきた。それで本省付けの大使として総理府に出向して、私の部屋の前に座ることになった。しかし、私は彼を使わなかった。彼は少しばかり報告を書いてきたが、私は、彼が頭のおかしい、訳の分らぬ人間（bababobo）だと知っているのに、読みもしなかった。それでも私は同情深いので、彼を外務次官に異動させようとしたが、スラキアット外相（1958年生、妻は王妃の実妹ターン・プージン・ブッサバーのむすめ、ハーバード大学博士、チュラーロンコーン大学法学部長、1995 - 96年蔵相、2001年2月 - 05年3月外相、05年3月 - 06年2月24日副首相、）が絶対ダメだと拒否した。そこで、タイの大使としては二番目に格の高い日本の大使にしてやった。タイの大使で、最高位は駐米大使で、二番目が駐日大使だ。駐日大使時代（2001 - 04年）に、

私は訪日したが、その時もカネを与えた。彼が停年1年前になって、駐米大使のポストが空いたので、駐米大使にしてやった。駐米大使停年の最後の月、(2005年)9月に私はスラキアット副首相(外交担当)とともに訪米したが、カシットは冷淡な態度であった。私は、カシットとスラキアットは仲が悪いからであろうと深くは考えなかった。ところが、停年前日のインタビューでカシットは私とスラキアットの二人を罵った。カシットはソムキット副首相(1953年7月生)の顧問になることを希望したが、私が反対して希望がかなわなかったことを知って、激怒したようだ。これが空港を占拠して、外相になったカシットだ。

上記タクシン発言からだけでも、彼がカネの人であることはよく判る。タクシンの罵倒と小僧扱いに対して、翌31日カシット外相は、TV3チャンネルの著名ニュースキャスター、ソラユット・スタサナチンダー(華人、1966年生、バンコク大学ジャーナリズム学部卒)のインタビューに答えて次のように語った。タクシンのやったことは原則や政策上の批判ではなく、個人攻撃であり、一国の元首相の品位を汚すものである。彼の言っていることは全て嘘で、頭が混乱しているようだ。私がタクシンからカネを貰った回数は数回に過ぎず、合計100万パーツにも達しない。返せと言うなら今すぐにでも返してやろう。タイの外相が海外を訪問した場合、その国のタイ大使館員などに少額のお金を配るのは慣習である。現に私も外相として実行している。タクシンがカネを配ったのは私一人だけではない。タクシンはカネで権力や独占権を買っているではないか。私の貰ったお金は少額で、しかも私はそれを私的に使ったことはない。今頃になって、どうしてこんなことを持ち出すのだ。私の任務は、タクシンが逃亡犯罪者であるということを各国に周知させ、外国がタクシンにタイ攻撃の便宜供与しないようにすることだ。タクシンがタイの旅券を返すつもりなら、郵送でも結構だ。もし、タクシンが望むならどこでも、ディベートに応じる。タクシンはもう何年間も、人と議論せず、偉そうに一人で話してばかりいる。私は質問者のソラユットと同様に、10年間くらいはタクシンのファンであった。しかしタクシンの行動に愛想を尽かして、批判を開始したのだ。タクシンよ、もう止めて妻子の元に帰って来てはどうか。再び権力を手にできるチャンスはどこにもないのだ。幻想をもつな。

2009年2月20日夜、Nation TV は人気女子アナ、ジョームクワン・ラーオペット(1977年3月生、シーナカリン大学情報学部卒)のカシット・ピロム外相との1時間インタビューを放送した。カシット自身がイメージアップのため入念に準備したもののようで、なかなか面白かった。以下、このインタビューの概要を紹介しておこう。

私(カシット)は1944年12月生れ、父は私を外交官にしたいと10歳の時にインドに送って英語を勉強させた。チュラーロンコーン大学政治学部に入学したのち、ワシントンのジョージタウン大学に留学し、国際政治の学士号を得た。同大学のクラスメートにはビル・クリントン元大統領やアロヨ・フィリピン大統領がいる。クリントンは、入学当

初から目立っており、奨学金を得てオックスフォード大に留学した。フィリピンは50～100の名門家族が牛耳っており、アロヨはその一人である。

1968年10月に外務省に入省した。私は10年ほど前から政界に出ることを考えるようになった。現枢密院議員のシティ・サウェートシーラーから選挙に立候補を勧められたこともある。駐米大使を停年退官(2005年9月末)後、3年前に民主党に入党した。民主党入りを勧めたのは、アビシットとステーブである。民主党を選んだ理由は、他の政党は、オーナーのいる「政治会社」に過ぎず、民主党のみが誰もが主人公であり、政党の名に値する本物の政党であるからだ。その時は、民主党政権がこれほど近いとも思わなかったし、今回の外相人事で候補者として名前が挙がった人も私だけではなかった。

タクシンとの関係の始まりは、私がインドネシア大使時代にタクシンが外相に就任し、私の上司になった時からである。その後、私がドイツ大使の時にも、タクシンはシーメンスとビジネスをしていたのでドイツに来た。私がタクシン体制に批判的になったのは、駐日大使に異動してからである。当時、日本の融資を受けてスワナプー空港が建設されていたが、建設にコラプションありとの報道が日本で多く、これについて私は詳しい報告書を何度も本省に送った(あと30年もすればタイ国立公文書館で公開されるものと期待する一筆者)。また、日本の一村一品運動と比較してタクシンがやっているOTOPは安易過ぎると考え、日本の一村一品運動についても報告した。日本やアメリカとのFTA、タクシンが進めたスラキアット外相を国連事務総長に推す運動にも賛成できなかった。

タクシンは、政治・経済の両権力、即ち Absolute Power を一手に握ろうとした。彼が追求したのは、一党独裁政治である。政治と経済を結合させるやり方は腐敗を生んだ。また、官僚の意見には全く耳を貸さなくなった。6 - 7年前までは、タクシンはアイデアに富み、よく人の話を聞いたが、その内に一人でしゃべり、一人で全てを決めるようになった。誰もがタクシンに反対できないようになった。タクシンのような唯一のリーダーという考えは、タイの立憲君主制と矛盾する。私の目標は、Liberal Thinking を実現することである。

タクシンはカンボジアの長期権力者フンセンと似ているという者がいるが、両者は全く異なる。タクシンは金持の大家族の出身であり、ぬくぬくと育った。頭脳の良さが傑出しており、特に数学ができた。貧しい寺小僧(Aram Boy)出身などではない。一方、フンセンは14歳から武力闘争に加わり、銃弾の下をくぐり抜けてきた戦士であり、苦勞人だ。

カンボジアとの国境紛争になっている地点は6ヶ所ある。東南アジア各国は、国境確定に長時間をかけた。国境問題は、双方がナショナリズムに立つと解決できない。タイの歴史教科書の内容は見直す必要がある。植民地化の脅威の時代に作られ、強いナショナリズム的叙述がそのまま残っている。例えば、タイで有名なプラ・ナレースワン王がビルマの支配者と象に乗って一騎打ちをし、勝利したという話などは、ミャンマー側の資料にはないと言うではないか。

タイ社会はこの10年間で大きく変化した。それは一言で言えば、市民社会(Civil Society)のウエイトが大きくなったことだ。協会、財団、NGO、それにインターネットの

役割が大きくなった。

私は外務省に入省して以来、仕事が楽しくて仕方がない。常に世界の動向とともにいることは何とも言えない喜びだ。私は部下のコラプションを一切認めない。大使時代は、任国の悪いところを見ず、良い所のみを見るように努めた。

最後に、ジョームクワンが、「何カ国もの大使を歴任された御経験から、タイを他の国と比較すると如何でしょうか」と質問した。カシットは「タイ人は規律が弱い。それに他人に遠慮することがなく、他人に配慮する気持ちがない (Mai krenghchai khon un, mai khit phu un)」と答えた。このような率直な自己批判を、タイ人から聞く機会は滅多にない。東京の大使時代に、筆者が彼と話した際の印象とは大部違っていた。インタビューの最後を、カシット自らがピアノを演奏して締めくくった。

タクシン、4月8日を大集会の日と宣言

4月1日、2日の両日は、タクシンのビデオリンクはなかったが、4月3日、タクシンは、Thailand needs change と書かれた演台で45分間のビデオリンク演説を行い、次のように語った。

私は殺されたという噂があるようだが、死んではいない。政府側と取引や交渉をしているというデマを政府側は流しているが、これは事実ではない。今のタイは真の民主主義ではない。今回の闘争で、一気にタイの一切の問題を解決しようではないか。4月8日に赤シャツの大集会を行う。全ての失業者や不公正な扱いを受けている公務員は集まれ！

タクシンは4月8日をピープルズ・パワーによる革命の日と宣言したのである。タクシンの演説を受けて、赤シャツ派の中核リーダーは4月8日を大集会の日として公表した。

「中核リーダー」たちも、実質は真のリーダーではなく、全てタクシンに最終判断を仰いでいる。それ故、タクシンの指示があるまでは、彼等は独自に明確な方針を示すことができない。4月1日と2日には、中核リーダーたちは記者たちから、赤シャツ派の集会は、これからどうするのだ、と問われて立往生していた。彼らは、情勢次第という曖昧な回答をする外なかった。3日になって、4月8日の大集会を、タクシン自らがビデオリンクで公表したので、やっと今後の方針が明確となったのである。

4月3日、ピット・グンラワニット(1932年7月生、陸軍大将、元陸軍司令官補、93年7月から枢密院議員)は、アピシット首相の対タクシン処断ぶりが遅いと苛立ちを示して次のように語った。

タクシンは有罪判決を受けているのにどうして刑に服さないのだ。彼だけにどのような権利があるというのか。タムブン(功德)の行事を行うことはできない王宮内のエメラルド寺院で、(2005年4月に)タクシンはタムブンの儀式をした、最近では「国王ご自身が私(タクシン)に電話をされて『タイに帰国してよい』とささやかれば(カシット)タイに帰国することができる」と公言するなど、不敬不謹慎な言動を重ねている。それに、タクシンが、カリブ海のケイマン(Cayman)諸島で資金洗浄をしているという話を元駐タ

イ米大使から聞いたことがある。

4月3日夜、久しぶりに国営テレビ放送 NBT を視聴してみると、黄シャツ支持派の元上院議員チョームサック・ピントーン（1950年生、スタンフォード大学博士）を司会者とする定期番組が放送されていた。チョームサックは元タマサート大学経済学部教師、かつては民主良識派というイメージであったが、この番組で、彼は「赤シャツ派は王制に対して悪意を有する者たち」と確たる証拠を挙げることなく決めつけ、その線で議論を誘導していた。民主党政権下で NBT は、黄シャツ派の AS TV の同類と化したようだ。

しかし、チョームサックのような者ばかりではないようで、2006年の国王在位60周年前後にベストセラーとなった『王権』(Phraracha Amnat)を書いたロイヤリストのプラムアン・ルチャナセーリー（国王が、前出のピー・マーラークンに、同書に大変満足していることを著者に伝えるように命じられたことが、同書序文に明記されている）は、4月5日、テレビインタビューで、「赤シャツ派は、枢密院制度全体を攻撃しているのではなく、枢密院議員の数人の行動を批判しているにすぎない。これは少数の議員の個人的な問題であり、王制への批判であると考えてはいけない」と語った。これは冷静な見解というべきであろう。

4月4日夜、タクシンはマハーサーラカム、ウドンの赤シャツの集會に Phone-in した。4月5日20時半、タクシンは総理府前で集會を続ける赤シャツ派にビデオリンク放送。この日、ナタウトはテレビインタビューで、「赤シャツの集會は毎日5万人が参加している」と語った。同日、アピシット首相は、「適当な時期に至れば、国会を解散するが、今はその時期ではない」と赤シャツ派の要求をあらためて拒否した。

4月6日は、1946年の同日に創立された民主党が、創立記念日の式典を開催した。この日、ネーウィン・チットチョープおよびサムサク・テーパスティンらのプームチャイ・タイ党（タイを誇りに思う党）は、建設業者であるネーウィンの義父の会社ビルを党事務所として事務所開きを行った。それぞれ与党第一党、第二党であり、両党の幹部は相互に党事務所を訪問してエールを交換した。6日、アピシットは再度、憲法の権利に従って赤シャツ派が集會を続ける限り、暴力で弾圧するようなことはないと声明した。

この頃、テレビ各局のニュースに、自家用機で世界中を飛び回るタクシンの画像が何度も登場した。恰も、自家用機をもって豪華な生活をしているような人物が、貧者の味方であるはずはないと言わんばかりに。また、虚実が混じったタクシンの家族や親族の国外脱出の情報も繰り返し報道された。出入国の情報をもつ政府が、タクシンの「元」妻や子ども、妹などの国外脱出情報を、虚実を混えてリークしたのであろう。テレビキャスターは、外国のタイ報道を紹介しながら、海外では圧力がないのでタイとは別の報道がなされていると時々語ったが、正に問わず語りである。タイでは、1933年10月のポーウォラデート反乱以来、政治状況が緊迫する毎に、政府はメディアを使って盛んに政治宣伝を行うが、今回もその例に洩れない。

ネーウィンの泣き顔の演技

4月8日の赤シャツ派大集会の前日である4月7日は事の多い日であった。

4月7日13時半、タクシンおよび赤シャツ派中核リーダーの度重なる非難攻撃に対して、ネーウィンは記者会見を行い、途中、半ば泣き顔を作ってタクシン首相（演技上手のネーウィンはタクシンを呼び捨てにせず、一貫してタクシン「首相」と敬称を付した）から受けた奴隷的扱いを一時間に亘って、要旨次のように語った。

会社の従業員が会社を辞めれば、会社との関係は切れる。会社は、辞めた元社員を追いかけてきて攻撃したりはしない。政党も同じで、考えの違いから別の党に移れば、それでおしまいのはずだ。ところが、タクシン首相のやり方は、出て行った者までも追いかけて傷つけている。私はタクシン首相のために命を捧げていると言われるほど働いた。タクシン首相が総選挙後の2008年（2月28日）に帰国することができるように努力したのも、私だ。

私はタクシン首相のために働くばかりで、何も彼に求めたことはない。ところがタクシン首相は、気に入らなくなると、私を裏切り者、恩知らずと非難している。どちらの方が裏切ったのだ！2008年9月、サマック（1935年6月生、2008年1月29日9月9日首相）に首相再選を約して置きながら、それをホゴにしたのはタクシン首相ではないか。サマックは最後まで自分が首相に再選されるものと思い込んでいたのに。私はタクシン首相の奴隷ではないのだ。

D Station TVは（2009年）1月15日の設立発表時に、「新しいタイ」を建設すると宣言したが、どうしてタイを新しく作る必要があるのか。新しく作るとすれば、現存の国家の基本制度（王制のこと）はどうなるのだ。タクシン首相の人民戦争が始まれば、各地の県庁は焼かれるであろう。タクシン首相はどうして自分の考えが国王の考えよりも優れていると言えるのか。私は国家がタクシン首相一人のために損なわれるのを見たくはない。タクシン首相に二つを求める。第一に、国王に忠誠であることを示すため、現在の活動を止めて欲しい。第二に、タイ国民とタイ国を愛するなら、国を分裂させるようなことは止めて欲しい。

しかし、テレビの解説者の言を聞く限り、ネーウィンの泣き顔への評価は、あれは政治家の演技だとか、ネーウィンがどんな人物かをタイ人はよく知っている、とかいう辛いもので、同情の声はなかった。また、この日を選んでネーウィンが声明をした理由を、あるテレビキャスターは、ネーウィンは与党から赤シャツ派の集会阻止の役目を与えられているのに、阻止できなかつたので声明を出すことにしたのだろうと解説していた。

06年9月19日クーデター後、07年7月22日夜に「独裁追放民主戦線」がブレーム枢密院議長のクーデター関与に抗議して同議長邸を包囲し、騒擾を起こしたが、その総指揮者はネーウィンであり、当時、チャトゥポンはネーウィン・グループに属してこの騒擾に参加したという。

4月7日の夜、タクシンはビデオリンク放送で、この日のネーウィンのインタビューを

「低俗ドラマの悪役が主役の座を奪ったようなものだ」と切り捨てた。タクシンは、ビデオリンク放送で、1932年立憲革命にまで遡って、32年憲法で国王は憲法の下に置かれ、全ての人は平等になったのだ。タイに階級のない平等な社会を作らなければならない。自分がタイに帰ってくると、5 - 6年の内にタイは変わる。失業者は全くなりなくなる、などと語った。これは、翌日の4月8日の大集会に民衆が多数参集し、自分の帰国・復権につながる情勢に発展するようという期待をにじませたものであろう。

ネーウィンのインタビューの翌日、チャローム Phua Thai 党下院議員団長は、次のように語った。「ネーウィンは、嘘を言っている。サマック首相を再度首相候補にできなかったのは、サマックに名誉毀損罪で有罪判決がでることが明白だったからだ。それに、ネーウィンは、タクシンから何も与えられていないというが、2008年(5月)にネーウィンの父チャイ(1928年4月5日生)を下院議長に選出する際、当時のPPP党は反対したが、タクシンが、ネーウィンはタクシンの代わりに死ぬことができる人物だ、その父のチャイを議長に頼むと推して実現したのだ」と。

ネーウィンのインタビューとチャロームの反論は、国外にいるタクシンが自派の決定に当ってオールマイティであることを端無くも曝け出した。

鬱屈したグラスルーツの怒りの暴力的爆発

4月7日(火曜日)は定例閣議の日である。総理府を赤シャツ隊に包囲され、入場できないので、閣議はパタヤーで開催された。閣議終了後、赤シャツ隊を避けるために予定外の道路を経て脱出しようとしたアピシット首相の車は、赤信号で止まった際に赤シャツ隊に気づかれてしまった。赤シャツ隊は、オートバイを首相車の前に突っ込んで横倒しにして首相車を運行不能にした後、首相車の前ドアを外側から開けて運転手を引きずり出そうとした。首相は後ろ座席に座っていたが、赤シャツ隊は後ろ窓のガラスに棍棒で穴を開けた。警察官がどうにか赤シャツ隊を引き離して、首相車はその場を離れることができた。この事件は、あとから見ると、これ以後生じる赤シャツ派の暴行・騒乱事件の前触れであった。

事件が一段落ついた4月14日のテレビで、赤シャツ派の暴力的激化について、解説者は次のように語った。黄シャツ派は、主に中間層、上層の人々の支持を得ている。一方、赤シャツ派の支持者はグラスルーツの大衆であり、彼らは常日頃、中上流階級社会から抑圧(kotdan)を受け、引け目を感じながら細々と生きている。彼らは中上流階級の人々から、汚職で汚れたタクシンを助ける愚か者と決めつけられ、日頃の劣等感を一層刺激されて、強く反発したのである、と。即ち、階級格差の大きなタイ社会で、下積みの人々の鬱屈した怒りに火がついたという解説である。4月20日の夜のテレビ番組に出演した一教授は、タイが必要なのは単なる政治改革ではない。今度の改革は政治とともに社会を改革すべきである、と語ったが、これもタイ社会の階層懸隔の大きさを意識した発言である。

今回の事件に限らず、タイ社会には日常的に暴力事件が蔓延している。異なる中等職業

学校男子生徒間の乱闘は日常茶飯事で、中には公共バスの中にまで相手側を追いかけてきて発砲射殺するようなケースもある。女子学校の女生徒が乱闘して髪をつかみ合う様がテレビニュースで放送されることもある。南部マレー・ムスリム地域の爆弾事件に加え、全国各地で生じる残酷な強盗殺人、強姦殺人事件が、日々報道されている。テレビニュースや報道特集を見れば、官吏に収賄して、鉱山開発や工場建設の許可を得た悪徳資本家たちが、住民の生活環境を破壊し、住民がこれに抗議すると、住民リーダーを殺害する事件があとを絶たない。4月26日(日)夜の Thai PBS TV の報道特集によると、この5 - 6年来、殺害された人権活動家や住民リーダーは21人に上るが、犯人逮捕に至ったものは殆どないそうである。同番組では、プラ・キティサック師(元共産党青年団メンバー、その後スワンモークで出家)を長とする開発僧グループは、チェンマイの北部にメータータムという共住地を開いたが、この土地を狙う悪徳資本家から様々な脅しを受け、僧侶の一人は殺害され、この3月には2回続けて放火されたことを報じていた。そんな遠くに行かなくとも、バンコクのど真ん中のクロントーイ市場では、同地の開発権を港湾公社から取得した資本家が、立ち退きを渋る小売り商人たちに対してやくざを使って発砲や商店の破壊を繰り返し、既に何人かの小売商を殺傷した。その様はテレビでもしばしば放映されている。これに対して警察は手をこまねいたままで二派の闘争に積極的に介入しようとはしない。

敬虔な仏教国イメージとは相容れない、浅ましい物欲の姿である。公私・自他の区別に乏しく、力を有するものは何でもできるというタイ社会、「カネ・モノ」、「うわべ」、「みてくれ」に高い価値を与え、これらを欠く者を見下し蔑む、タイ社会およびタイ華人社会の現実が如実に現れている。

チャーンチャイ枢密院議員暗殺未遂事件

4月7日には、赤シャツ派が辞職を要求している枢密院議員の一人、チャーンチャイ・リキットツタ枢密院議員の暗殺未遂犯3人が逮捕されたことが発表された。この事件は、何とも曰わくありげで理解し難い内容である。それによれば、殺し屋は三重四重もの下請けを経た末端であり、最初の元請けには依頼人から100万バーツが払われたが、末端の殺しの実行者に約束された報酬は5万バーツ程度であったという。殺し屋たちには、チャーンチャイが枢密院議員であることは知らされず、ただ北タイの某ビジネスマンの商売敵である華人であると説明されていた。ところが、殺し屋が、与えられた標的の自家用車の番号を調べたところ、王宮用のナンバーであることを知り、驚いて警察に自首したというのだ。テレビがインタビューした、別の殺し屋業の親玉の話によれば、普通、職業的殺し屋は、指定された標的が何者かなどは詮索せず、仕事を引き受けた以上は、ただ全うするものであるというのだが。

チャーンチャイ枢密院議員の暗殺未遂事件は、これだけでは終わらなかった。自首した者の自白により、4月9日には、暗殺依頼人として殺人未遂の容疑で、51歳のセート・

ベック（実名、チャクラクルット・セーカナン）海軍現役大佐が逮捕された。彼は海軍から出向して、現にサナン・カチョンプラサート副首相の下で働いている人物である。人違いであったとして16日には釈放されたが、仮に、サナン副首相がチャーンチャイ枢密院議員謀殺に関与していたとすれば、赤シャツ派を弾圧する口実をつくるための謀略だと考えられるだろう。それにしても、4月9日の時点で、警察が政権有力者サナン副首相の下で働く現役軍人を逮捕したことは、政府と警察との間のすきま風を示していると思われる。

司法官として出世街道を上りつめたチャーンチャイも、政争のためにいつ人身御供にされるかわからない恐怖感を十分に味わったことであろう。

4月8日の大集会

4月7日には、8日の大集会のためチェンマイやウドンから数十台のバスが出発したことが報じられた。チェンマイでは、貸切バス会社の経営者が、役所からの圧力で急に運行できなくなったと赤シャツ派に伝えてきたが、赤シャツ隊がバス会社に押掛けたので、経営者もやむを得ず翻意したという。7日の報道では、4月8日のバンコクの集会者は8万人程度の見込みと報じられていた。一方、7日晚、中核リーダーたちは、ブレード枢密院議長邸前で集会するつもりはないが、もし、数十万人の赤シャツ派が街頭に出て、総理府から五世王騎馬像広場、シーサオ・テーウェートのブレード邸までを埋め尽くすことができれば、自ずとブレード邸前の集会が成立するだろうと述べていた。4月8日の戦術は、集会への人の集まり具合を見ながら、タクシンが戦術を決めるだろうと報じられた。

4月8日の集まりは、赤シャツ派が期待したほどではなかった。不満を募らせた赤シャツ派は、テレビの3, 7, 9チャンネルの報道が、集会者数を不当に過少に報道していると、これらのテレビ局の記者に八つ当たりし、赤シャツ集会のなかでテレビ局の記者の取材が困難となった。

内務省の報告では、4月8日朝の赤シャツの集会者数は4万人、昼・夕方には8万5000人。ステーブ副首相は5万人、警察の調べでは8万人。最も多い数字はAPの10万人であった。バンコクの集会の外にも、北タイや東北タイの県庁前でも赤シャツ派は数百人規模の集会を開いた。4月8日16時、総理府前の赤シャツ派中核リーダーは、ブレード、スラユット、チャーンチャイ3枢密院議員の辞任、アピシット首相の辞任、普遍的な原則に基づく政治の民主化、の3要求を出し、24時間以内の回答を求めた。タクシンのポチャマーン前夫人（1956年11月生）や子どもたちが4月6日から順次国外に脱出していることが報道されたためか、この日の集会にはタクシンの妹のヤオワパー・ウォンサワット（1955年5月生、チェンマイ大教育卒、NIDA修士、Phua Thai 党の北タイ責任者、ソムチャーイ前首相の夫人）が姿を現した。

同日20時30分から30分間のビデオリンク放送で、タクシンは3日間我慢して集会を継続するように求めた。テレビニュースは、ドバイに居るタクシンのガードマンが30人に増加したと報じた。ビデオリンク放送ののち総理府前の赤シャツ派主舞台は、主にコ

ンサートと変わったが、プルーム邸前では一晩中批判演説が続いた。しかし、この日暴力事件は何も生じなかった。

4月9日になると、赤シャツ隊はバンコク各地に分散して市内の交通網をマヒさせた。タクシン支持派はタクシーを多数停車させるやり方で、戦勝記念塔周辺、民主記念塔周辺およびスクムウットの一部を通行不能に陥らせ、大渋滞を生じさせた。この夜、アピシット首相は、国営テレビNBTで、政府は法律の厳格な適用を開始した、と警告し、政府も真の民主主義を目指しているので、民主主義を求める者は帰宅せよと呼掛けた。また、バンコク市内の交通マヒ問題を軽減させるため、翌4月10日(金)を臨時公休日にするを発表した。週明けの13日から15日はソンクラーンの祭日であり、アセアンサミット流会後、政府は16(木)、17(金)も臨時公休日としたので、結果的にはお役所は10日から19日まで10連休となった。

4月9日夜のビデオリンクでは、タクシンは、イッタポン・スパウォン空軍司令官(1952年1月生、2008年10月から現職)がタクシン派は共産主義者(コミニスト)だと発言したことを批判して、次のように述べた。この司令官はバカではないだろうか。今どき、世界中でどこに共産主義者がいるだろうか。中国も完全に資本主義だ。「アマート」(高官)は遅れている、古い考えのままだ。彼等は農民の声を全く軽視している、と。

パタヤーのアセアンサミット粉砕、警察のギア・ワーン

4月10日朝になっても、バンコクの戦勝記念塔や民主記念塔周辺では依然交通マヒが続いていた。ただ、臨時公休日となったため、車の通行は普段より少なかった。しかし、この日の主要戦場は、バンコクではなく、アセアンサミットが開催されるパタヤーに移った。

4月8日から赤シャツ派の集会で、一部の中核リーダーはアセアンサミット粉砕を言い始めた。9日夜からバンコクの赤シャツ派の一部はパタヤーに移動を開始した。500台ともいう多数の赤シャツ派タクシーも移動した。タクシーは、道路上に放置すると交通をマヒさせることができるので赤シャツ派の強力な武器である。その威力は、既に9日にバンコクで示された。

4月10日、パタヤーでアセアン10ヶ国の外相会議が開催された。赤シャツ隊は会場近くで会場に来たフンセン、カンボジア首相にクメール語で「来タイ、歓迎」と叫んだ。元歌手で政治家のアリスマン・ポンルアンローン(1964年1月ラーチャブリー県生、96年下院議員初当選、2005年タイラクタイ党下院議員、07年6月9日に「独裁追放民主戦線」創立に参加)に率いられた赤シャツ隊は、会場であるロイヤル・クリフ・ビーチ・ホテルを包囲し、ASEAN事務局長代理に文書を手渡すことにも成功した。

翌4月11日(土)は、ASEAN+3およびASEAN+6首脳会議の日である。この日、朝から24時間体制でニュースを報道していたのはNation TVだけであった。同テレビは、朝早くから紺シャツを着、紺色の覆面をした400 500人の男性が、木の

棒を武器にして赤シャツ隊と対峙していることを報じた。彼等は、警察、兵士およびブリラム県（ネーウィンの地元）の壮者たちから成り、パタヤー入りしたネーウィンが指揮している、という。（かつて同盟派の集会で警備をしていた青年も混じっていたと報告もある）しかし、テレビ画面をよく見ると紺シャツ隊先頭部分には、赤シャツのようにヘルメットを着けた者はおらず、白兵戦をやれば極めて不利である。パタヤーを、武装防備も十分とは言えない、数百人程度の紺シャツ隊で守りきれると考えていたのなら、とんでもない見込み違いであろう。

8時40分、両者が10メートルの距離を置いて対峙していた場所で、小競り合いが始まった。投石が繰り返され、銃声も響いたようだ。しかし、白兵戦に発展することもなく、間もなく収まった。警察は両者の衝突に何等介入しなかった。この後、赤シャツと紺シャツとの間に話しがついたということで、両者の衝突はもう生じなかった。

9時頃には次のような報道があった。日本の麻生太郎首相が宿泊するアマリホテルおよび中国の温家宝首相と韓国の李明博大統領が宿泊するドゥシットタニーホテルの周辺の道路に、赤シャツ派タクシー隊が多数停車して交通がマヒしている。首相・大統領車が移動できないので、日中韓間の3国外相、首脳会談は予定通りには実施できなくなった、と。

更に、両ホテルからASEAN10ヶ国首脳が宿泊するロイヤル・クリフ・ビーチ・ホテル（首脳会議会場）までは、海岸沿いに4 - 5キロ離れているが、この道も赤シャツ隊により遮断されたので、各首脳は会場に行くことができず、同日午前中に予定されていたASEAN首脳と中国、韓国、日本の個別会議は開催できず、遅延することとなった。

そのような状況下で、12時50分、アリスマンに率いられた赤シャツ隊数百人は、ロイヤル・クリフ・ビーチ・ゾート内の首脳会議会場にガラスを割って侵入しプレスセンターを占拠した。彼等はその奥にある首脳会議の場には、ガードが堅く侵入できなかったが、プレスセンターの記者会見の設備を用いて、アリスマンは13時20分に要旨次のように声明した。「アピシットの命令でタクシー運転手二人が銃撃され重傷を負った。アピシットは人殺しであり、我々は善良な市民の義務として犯罪者（アピシットのこと）を追って会場に来たのだ。我々はアピシット以外の人に危害を加えることはない。アピシットは一時間内に犯人を逮捕せよ。我々貧民と雖も、その命は、豚や犬と同じではないのだ。国王は、国王を崇敬している我々の行動を御理解されると思う。国王は民主主義者だが、9月19日クーデター時には、クーデター勢力に強いられて布告に署名をされたのだ。今こそ、国王の権威を回復しなければならない時である」。

彼らは朝の紺シャツ隊との衝突による赤シャツ隊の被害を過大に強調して、会場乱入の口実としたのである。会場に乱入した赤シャツ隊には、それほどの緊張した様子は見られず、ビデオカメラや携帯電話で記念撮影をしたり、会場のソフトドリンクを失敬して美味しそうに飲む姿をテレビは映し出した。その直後の13時50分、アピシット首相はパヤターとチョンブリー県に非常事態を宣言し、アセアンサミットの延期を発表した。（アリスマンは4月27日に自首、直ちに保釈された。5月18日朝のニュースは、赤シャツ派の

資金集めも兼ねてアリスマンがコンサートを開催することを報じていた。)

テレビで見ている、群集がいつも容易に首脳会議の会場に乱入できたことには、驚きを禁じ得なかった。あり得ないような話である。警備の警察は何をしていたのであろうか。何重にも警察官が警備していたが、彼等は群集に押されるままに道を開けたのである。群集の前に立ちはだかって阻止することもなく、群集に押されるままに任せた警察の行動は、車のギアをニュートラルにしている（ギア・ワーン）状態という比喻で批判された。タイのデパートなどの混み合う駐車場では、ガードマンが他の車のためのスペースを開けるために駐車中の自動車を手押しで動かす。そのため、駐車する者は、ギア・ワーンにしておくように求められている。群集に押されるままで、踏み止まらなかった警察の行動を的確に表した表現である。

タイの警察が頼りにならないことは、タイ人も外国人も日常経験していることである。今回もその本領を十二分に発揮して、世界に知らしめたと言ってしまうればそれまでだが、今回の事件中頻発した警察のギア・ワーンの背景としては、アピシット首相が、赤シャツ派に暴力は行使しないと何度も公言していたこと、および昨年10月7日の国会前での催涙弾発射死傷事件で警察幹部の責任が厳しく問われたこと、がある。これでは、敢えて処罰・失職の危険を冒してまで、強力に群集を抑えるように部下に命じる警察幹部がいなかったのは当然であろう。それを考えて、政府側は私設の紺シャツ隊を準備したのかも知れないが、中途半端なものに過ぎなかった。

16ヶ国の首脳に大迷惑をかけ、タイ国の信用を失墜させる大失態を招いた、アピシット、ステープの読みの甘さは批判されて然るべきであろう。全世界に、トップ・リーダーさえ国内治安を統御できない国という印象を与えた後遺症に、タイは当分苦しむことは避けられまい。それにも拘らず、5月に入ると、政府は6月13日 14日にブーケットで首脳会議を再度開催する案を各国に打診した。しかし、5月13日には参加国の日程が合わないという理由で、6月開催断念を発表せざるを得なかった。

5月6日、内務大臣が、時ならない異例の知事異動を発表した。パタヤーのあるチョンブリー県知事が、赤シャツ隊を抑えることができなかった北タイのプレー県、ナーン県の両県知事とともに左遷された。

4月12日アピシット首相車への攻撃、当番兵の不審死

4月12日、アピシット首相は、警備に手抜きありとして警察司令長官を厳しく叱責したという。

4月12日15時、アピシットは国防相、内務相らとともに内務省でバンコク、ノンタブリー全県およびサムットプラカーン、アユタヤー、ナコンパトム、パトムターニー（この県にタクシンがビデオリンクに使った通信衛星会社タイコム（タイコム）の施設がある）4県の一部の郡に非常事態宣言を施行する発表を行った。帰路、内務省を出ようとしたところ、スポン・アッターウォン元下院議員（45歳、選挙区はコーラート、ニックネームは「東北タ

イのランボー」というそうだが)に率いられた赤シャツ隊は、数名の赤シャツ支持の僧侶も加わってアピシット首相の車を襲った。首相の車に一男性が飛び乗り、棒でフロントガラスを突き破った。僧形の人物が足で首相の車を蹴る画像がテレビに流れたという。

4月20日、本事件の捜査責任の警察高官は会見して、外国で首相の乗っている車にあのような行為をすれば、間違いなくその場で射殺されるだろう、と語った。この会見を放送した Nation TV のニュースキャスターは、あの場で警察がもし射殺していたら、赤シャツ隊の騒乱に一層拍車がかかって、事態は悪化し解決不能になっていたであろう、とコメントしていた。

同キャスターによれば、僧侶のデモや集会参加が昨今頻発している。プラ・マハー・チヨーのように舞台上がって演説する僧侶までいる、という。タイと同じ上座部仏教世界でも、ミャンマーやスリランカの僧侶は政治に関与していることから判るように、戒律には僧侶の政治関与禁止の規定はない。但し、アムナート・プアシリ大長老会議事務局長が4月21日に説明したところでは、タイではタイ・サンガの布告を根拠として、僧侶は政治関与を禁止されている。しかし、僧侶の政治関与は戒律違反ではないので、違反者に対する罰則は軽く、もし政治活動に関与しても、刑法犯でなければサンガ組織から注意を受け、始末書を書く程度で済むという。

アピシット首相車への攻撃に話を戻すと、フロントガラスを破壊されながらもアピシットがどうにか無傷で脱出できた理由について、4月24日早朝の国会演説でアピシットは次のように明らかにした。危機一髪のところ、警備の軍警が空に向かって発砲し、赤シャツ隊がひるんだ、その一瞬に車をバックさせて辛うじて逃げることができた、と。しかし、首相秘書官のニポンは傷を負った。軍警は、首相やニポンを十分には防御せず、アピシットは命辛々ようやく脱出できたのである。アピシットが受けたショックは大きかったようだ。加えて、非常事態宣言を出したにも拘らず、12日の夜に至る4 - 5時間は、軍の動きは鈍く、アピシットは本気で辞職を考えたという(4月19日朝の Nation TV のニュース)。

5月初めになって、チャトゥポンは、実は襲撃された車には、アピシット首相もステープ副首相も乗ってはいなかった、あれはアピシットらが赤シャツ派を弾圧する口実作りのためにでっち上げた自作自演の茶番劇だったと発表した。アピシットは直ちにこれに反論した。テレビのニュース解説では、「嘘をつけば地獄に墜ちるぞ」とチャトゥポン説には懐疑的であった。

4月12日と翌13日、アピシットはステープ副首相とともに、身の安全のために陸軍第一軍管区司令官カニット・サピタック中将の官舎(第一歩兵連隊内)に宿泊した。アピシットがここに宿泊したことが明らかになったのは、この官舎で14日に当番兵が倒れ、間もなく死亡するという不審な事件が生じたからである。カニット中将の3名の当番兵の一人で、宿泊中のアピシットの世話もしたアピノック(22歳)が、同官舎内のトイレの中で首から多量出血して倒れているのが見つかったのである。彼は病院に運ばれたが、翌

15日朝には死亡した。軍は、この兵士は足を滑らせて運悪く首の骨を折ったと説明して、遺体を遺族に渡し、火葬を急ぐように促した。軍の態度に不信感をもった母親は火葬したように見せかけて遺体を保存し、Phua Thai 党に訴えた。同党議員は4月22 - 23日の国会で、この事件を取り上げた。母親は、息子が電話で「アピシット首相はもうここにはいない」などと話したのちに倒れたので、軍の事故死説明に疑いをもったのである。

4月26日、アピシットは記者の質問に、アピノック当番兵に官舎で世話になったことを認めたが、倒れたのは自分が官舎を出た後であるから、自分とは関わりはないと答えた。(アピシットの記者とのやりとりを聞いていると、この人の決まり文句は、「最初から自分には判っていたことだが」と「それは自分とは関わりない」である)同日、母親は Phua Thai の議員の付き添いのもとに、法務省所轄の法医学研究所を訪ね、Phua Thai 党所属の医師の立ち会いのもとに検死を求めた。正義派イメージの強い同所長クンジン・ポンティップ・ローチャナスナン女医(1954年12月バンコク生、マヒドン大学医学部卒)は、今まで第三者の医師の立ち会いのもとで検死をしたことはないのも、もしこれを認めれば「二重基準」という批判を受けると、断った。結局、彼の遺体はシリラート病院の医師団により翌27日解剖された。ここでも立会いを許されたのは遺族だけであった。検死後、医師団は、死因は頭蓋骨下部を骨折し、その出血で脳が圧迫されたためであると説明し、頭が割れるような強い打撃をどうして受けたのかを調べることは警察の仕事であると語った。

タイ軍の幹部が、徴兵された兵士を自家用車の運転手や家事などに私的に使うことは慣行である。給与の出所は軍で、兵士たちは月末の給料日だけ所属部署に出頭し給与を受領している。死亡した兵士が、第一軍管区司令官の当番兵になったのは最近のようで、彼は携帯電話で母親に、洗車をやらされていることや、仕事は楽だなどとも語っていたという。彼が政争の人身御供かどうかは不明だが、不自然で不運な死亡ではある。

4月12日、北タイではラムプーン、チェンマイ間のハイウェイが赤シャツ派により占拠され、通行不能となった。また、同日バンコクのディンデーンでは、赤シャツ派は武器を運搬してきた軍用車を一時奪取した。同日、タクシンはカンボジア国境を越え、タイ領のコ・チャーン島に居るといふ噂が流されたが、20時過ぎステーブ副首相は、タクシンは依然ドバイに居ると言明した。

4月13日、赤シャツ派弾圧負傷事件

例年ソクラーン休暇は4月13日から15日までの3日間であり、近年4月13日は「高齢者の日」、4月14日は「家族の日」と定められた。しかし、非常事態宣言下の今年の4月13日(月)は、異例の日となった。この日、バンコク中心部の繁華街やデパートは軒並み閉店、石油スタンドの一部も閉店した。街の中での水掛行事も少なかった。特に外国人バックパッカーが集まるカーオ・サーン地区は、例年盛大な水掛祭りを行っているが、今年中止された。(昨年の空港閉鎖以来、カーオ・サーン地区の外国人客自体が驚くほど減少している)

赤シャツ派と軍隊の衝突は、4月13日(月)5時前、未だ暗いうちに、戦勝記念塔に近い、ディンデーン路とラーチャプラロープ路が交わる地点で始まった。火焰瓶を武器とした赤シャツ隊数百人は、警備の軍隊と衝突。軍隊は威嚇射撃を行った。70名程度が負傷したという。アピシット首相によれば、銃撃で負傷したのは、4人の兵士、2人の赤シャツ派のみで、死者は出なかったという。

赤シャツ派は、バンコク旧中心部の交差点などで、強奪したバスに火を付けて、あるいは古タイヤを燃やして交通をマヒさせた。ペップリー路の起点ヨマラート周辺や同路ソーイ5やソーイ7では、赤シャツ隊は反赤シャツ派の住民と衝突し、投石や銃撃が生じた。この日の負傷者は合計113名(含む2名の死者)で、この内兵士の負傷者は27人と報道された。死者の二名とは、総理府に近いナンローン Nang Lerng 市場の民家を、13日夜、外見赤シャツの一団が放火しようとしたのを阻止しようとして、銃撃された住民である。(4月27日には事件の総負傷者は2名の死者も含め176名と発表された)。赤シャツ派に4月13日までに奪取されたバスは合計42台で、うちBMTA(バンコクバス公社)のバスは33台、民間路線バス9台であった。この内14台が焼かれたという。

13日に、政府はD Station TV 放送を切断した。これで、赤シャツ派の最大の宣伝手段が失われた。

同日、タクシン首相時代の上院議長スチョン・チャーリークルア(タクシンの旧妻ポチャマーンの親類)ら旧上院議員および軍と警察の元幹部が「国民の多数派は、司法権・行政権の行使が公正ではないという不満から街頭にでて、司法・行政の二重基準をなくし、タイ社会に正義と公正が戻ってくるように求めている。数十万人(マ)の平和的な集会在、政府の非常事態宣言後の弾圧で多数の死者がでる危険性がある」として国王に介入を求め請願上奏文を副宮内長官に提出した。しかし効果はなかった。

4月13日23時、アピシット首相はテレビ放送で、総理府付近以外の道路占拠は同日夕方までに解かれ、交通は正常化した。政府は法律を遵守し、暴力的な弾圧は一切行っていない、死亡者はナンローンの二人を除けば、一人もいない、と述べた。政府の弾圧で死亡者が多数でたという赤シャツ派の大宣伝に対処して、政府は情報公開に努め、テレビに各病院の責任者である医師を出演させ、入院中の負傷者はいるが死者はでていないことを説明させた。

4月13日夜、軍隊は、総理府で集会を続ける民衆に対して、地方から来た人で帰郷したい人には、バスと食事を用意している、集会を抜出してバスに乗るように呼掛けた。テレビの報道では、呼掛けに応じて集会場を立ち去る人は一人もいなかったという。

4月13日は、タクシンもアピシットもBBCやCNNなどのインタビューに応じ、海外メディア上でも、両者の合戦が展開した。タイのテレビは、英語の達者なアピシットの方に軍配を上げた。

4月14日朝になっても、赤シャツは総理府近くのピサヌローク路上で、公共バスに火を着け全焼させた。放火の様はテレビで実況中継された。

4月14日には総理府は完全に軍隊に包囲され、新たな集会者が会場に入ることは不可能になった。集会場に残る者には女性も多い。同日午前11時、中核リーダーたちは、集会を止めることを決定した。ウィーラ、ナタウト、ウェーン医師の3リーダーは投降した。チャカポップ(1967年10月生)と下院議員のチャトゥポンは、姿を消した。その後、チャトゥポンは国会議員の不逮捕特権を主張して、4月22日の上下合同国会にも出席した、彼は国会の会期終了の直前の5月18日に警察に出頭し保釈された。チャカポップは国外に脱出し、4月20日にはBBC放送とのインタビューで、平和的方法で闘う余地は少なくなったとして地下での武力闘争移行を示唆した。

解散時には、集会場をサナム・ルアンに移動するという情報もあった。11時30分過ぎ、非常事態本部長の立場でステーブ副首相が、赤シャツ隊の集会解散を公表するまで、テレビ解説者も、直ぐには、集会を本当に止める決定をしたのか、謀略なのかを判断できなかった。

14日には、プラソップスク上院議長の提案で上院(定数150名)の一部議員が参加して、事態打開のために懇談会を開いたが、何の役割も発揮できなかった。

同じく14日に、シーロムのバンコク銀行本店とCPグループ本社への放火未遂犯3人が、13日夜に逮捕されたことが発表された。彼等が放火を実行する直前に、警察のスパイから通報があったそうである。犯人に前金として渡されていたという、2000パーツも押収された。放火未遂犯は、総額5000パーツで引き受けたというが、俄には信じがたい話しであり、毎度のことながら何か裏がありそうではある。但し、黄シャツ派を支援したCPやバンコク銀行が赤シャツ派に憎まれていることは間違いない。5月6日チェンマイの赤シャツ派「ラック・チェンマイ51」は、預金を解約し空になったバンコク銀行の預金通帳500冊を集めて焼き捨てたし、CPが経営するセブンイレブン不買の運動を開始した。彼らは、バンコク銀行だけではなく、タイ農民銀行の預金も解約する予定だそうである。

4月15日になって、外務省は4月12日付けでタクシンの一般パスポート(茶色)を取り消したことを公表した。これでタクシンはタイのパスポートを一切使用できなくなった。しかし、タクシンは、ニカラグアの外交パスポートも本年1月から保持しているので海外での動きを完全に封じられることはない。4月19日朝のNation TVニュースは、タクシンはドバイを発ちニカラグアに向かったと報じたが、4月22日の同ニュースは、タクシンは依然アラブに居ると訂正した。

15日にはタイ国学生連合の役員が、弾圧で50-60人が死亡したという情報があるのに、マスコミはどうして口を閉ざしているのだと批判した。これに対してNation TVのニュースキャスターは、隠してはいないが今のところ死亡情報はないと説明していた。この直後、バンコクの郊外、ラートプラオの一寺院で、軍が弾圧で殺した数十人を密かに火葬したのではないかという情報が飛び交った。各局のテレビ記者が同寺を訪ね、調査した結果、事実無根であることが判明した。

1992年5月事件の17周年追悼会が、5月17日に実施されたが、この前後、タイ

の各テレビ局のニュースは、二つの事件で大騒ぎをした。一つは、日本人男性とタイ人女性（物故）との間の小学4年生の男児、ケイゴ君（9歳）が、音信不通の父親を捜して二年間もピチット県の自宅近くの観光地に来る人に写真を見せては探している話（各テレビ、新聞が大々的に報道したため、5月22日午後には在バンコク日本大使館で日本にいる父親とテレビ会見をすることができた）。もう一つは、タイ湾に投棄されている不審なコンテナのなかに、92年5月事件で行方不明のままになっている犠牲者たちの遺体があるのではないかという話である。

4月15日朝、チャオプラヤー河のプラピンカーオ橋下に、赤シャツ支持者ガードマン二人の死体が浮かんだ。二人とも、後ろ手に縛られ、頭を割られていた。2 - 3日前に殺害されたものと思われると報道された。一人の被害者の妻の話では、それほど熱心な赤シャツ支持派でもなかったが、集会に行くと言って出かけたまま帰ってこなかった、という。赤シャツ側は、このガードマンは当局に殺害されたと述べた。毎週日曜日に国営テレビ放送NBTで『アピシット首相とともにタイ国への信頼を深める』番組が放送されているが、死体が浮かんだ後の4月19日（日）の放送で、アピシットはこの二人が殺されたのは、4月14日深夜以降であり、官憲に殺されたものではないと否定した。

この二人が何故殺されたのか、犯人は誰なのかは、多分永久に判らないであろうが、筆者には、何者かが政治宣伝・謀略のために殺したように思えてならない。タイでは、政治目的のために、いとも簡単に人命が奪われたケースが多いからである。

15日には、民主党のバンコク選出のムスリム下院議員サマイ・チャローンチャーンは、ムスリムを率いて鬼の首をとったかの如く意気揚々と、アラブ首長国連邦（同連邦の最大都市ドバイにタクシンが住んでいる）の代理公使を訪問した。そして、13日にペブブリー路ソーイ7のマスジット（イスラム・モスク）が赤シャツ隊によって放火されたとして、タイ・ムスリム評議会やムスリム記者協会などの名も用いて、タクシンをドバイから追放するように求める文書を手渡した。しかし、この2団体は、直ちにサマイが無断で団体名を使用したと非難した。

4月16日、二日ぶりに姿を現したチャトゥポンは、4月14日の朝、総理府前の集会場を出たが、戻って来たら全て軍に包囲されており、なかに入ることができなかった、脱走したのではない、現在国会開会中なので議員の不逮捕特権の適用を求める、と述べた。そののち、ナンローンの住民二人の銃殺も、上述ペブブリー路ソーイ7のマスジットへの放火も、赤シャツを着たネーウィン派がやったことである。これについて確実な情報を提供した者には、50万バーツの賞金を出すと語った。

4月16日は、警察はウドン県とラムパーン県の赤シャツ派のコミュニティ・ラジオ局を、集会中煽動したことを理由に、手入れし、放送機具を押収した。D Station テレビの切断やバンコク周辺の赤シャツ派のコミュニティ・ラジオだけではなく、地方の赤シャツ派のコミュニティ・ラジオ局も大きな打撃を受けているようだ。

4月17日早朝ソンティ・リムトーンクン銃撃さる

4月17日早朝5時40分、ソンティ・リムトーンクン(1947年11月7日生)が乗った車がAS TV放送局近くのサームセーン路上で狙撃された。まず側面からタイヤを打ち抜かれ、停車したところを、今度は正面から軍隊用のアーカー、M16銃等で100発以上もの発砲を受け、ソンティ、運転手、秘書兼ボディガードの3名が負傷した。ソンティはガードのために後続車を伴っており、この車から狙撃手たちに向かって応戦したため、狙撃手はソンティにとどめを刺すことなく逃げ去ったようだ。筆者が国立公文書館からタマサート大学へ移動するため、毎日通っている路上で、ギャング映画顔負けの活劇がくり広げられたのである。

4月22日には、銃弾にはRTA(Royal Thai Army)の刻印があるので、タイ陸軍のものが使用されたことが発表された。ソンティ銃撃の真相は、多分永久に不明だろうが、もしソンティが死亡していたら、黄シャツ派と赤シャツ派の衝突が拡大した可能性もあるだろう。その結果利益を得る勢力が仕組んだ可能性も十分に考えられる。もしそうであれば、まさにタイ人がしばしば口にする「第三の手」の仕業である。

翌18日には民主党のチュアン・リークパイ元首相は妻子をソンティのお見舞いに送り、また民主党のガンラヤー・ソーポンパーニット科学技術相などの閣僚の何人かも自ら見舞いに出向いた。図らずも、民主党とソンティの浅からぬ関係が露顕した。更に、黄シャツ派のリーダーから民衆まで多数の人がお見舞いに訪れ、ソンティは却って元気を得たという。4月21日ソンティは知人に、銃撃された時はひたすら一心に国王の威光(バラミー)を念じたので助かった、と語ったそうである。転んでも只では起きない人ではある。(この種の事件ではいつものことだが、彼がお守りにつけていたブラの価値が急上昇した。)

21日、ソンティの息子が、ソンティ銃撃には紺シャツが関係していると語った。紺シャツ隊のボスは、ネーウィンである。ネーウィンの父であるチャイ下院議長は、自分はネーウィンを手塩にかけて育てた。人殺しをするような教育をした覚えはない。息子は他人にいつも親切なので、議員にも大臣にも選ばれたのだ、と反論した。

退院したソンティは5月3日に記者会見を行い、銃撃について次のように語った。狙撃犯は10人くらいのチームで、4台の車に分乗していた。一石二鳥を狙ったもので、黄、赤を問わず院外のあらゆる市民運動のリーダーたちに恐怖感を与え、これらの運動を抑え込もうとしたものと考えている。狙撃犯は陸軍の下士官だが、命じたのは一部の軍高官である。院外の民衆の運動の拡大が旧来の院内のみの政治を変えることを恐れる頭の古い政治家や、私的利益の機会を失う軍高官などが、その背後にいる、また、軍と関係の深い高貴な女性も係わっている、と。

ソンティの言う高貴な女性とは、ソンティと対立しているターン・プージン・ウィリヤ・チャワクン「国境の軍・警察・志願兵の志気高揚財団」理事長を指すものと推測された。彼女は王妃に近い人と言われている。彼女は、今年の4月4日に、タクシンは王室に忠実であると直感的に感じる、と語った。このタクシン擁護発言に対して、ソンティは4月7

日に彼女を次のように批判した。彼女は数年前に、王妃に献上するためと称して、原価を遙かに上回る値段でロゴ入りのシャツを役所に売りつけようとした人物である。多分、タクシンに買収されたのだろう、と。疑いをかけられた彼女は、次のように嫌疑を否定した。女一人の細腕でそんな大事ができるだろうか、自分が住むソーイー帯の土地は全て自分の親族が所有しており、金になんか困っていない。現国王はかつて、仏像でさえもが批判を受けることがある、と語られたことがあるではないか！（5月30日のテレビニュースによれば、王妃の実妹ターン・プージン・ブッサワーは近々ウィリヤのために慰問会を開くと言う）

3月22日と27日にタクシンが枢密院議員スラユット大将を批判した後に、ソンティは記者に感想を聞かれて、スラユットが批判されるのは当然だと言い、「様をみる！」と数回繰り返した。ソンティと、彼が助けたはずの体制派との間には、隙間風が吹いていた。ソンティも御用済みとして屠られそうになったのだろうか。そうであれば、正に狡兎死して走狗烹らるの好例であろう。

4月19日（日）アピシットのテレビ定例放送

4月17日（金）閣議終了後の秘密閣議（関係官僚等を退席させ閣僚のみで開催）で、アピシット首相は、パタヤーや内務省で生じたアピシット首相車への攻撃は、彼の命を狙った計画的なものであったと発言したと言う。首相への警備はものものしいものとなり、4月19日のテレビ番組収録も、従来のようにNBTではなく、総理府で行われた。

4月19日（日）9時、アピシット首相は、国営テレビ放送NBTから『アピシット首相とともにタイ国への信頼を深める』番組で、次のように語った。

4月11日に赤シャツの妨害のため、アセアンサミットを取りやめ、バンコクに戻って来たが、赤シャツ派はサミット後も騒乱を止めず、タイ政府に統治能力がないことを世界に印象づけようとした。これはタイの観光産業や投資に大打撃となる。そこで4月12日にバンコクにも非常事態宣言を出すことを決めたのだ。自派の政治的利益のために出したものではない。憲法が権利として認めている平和的な集会は、十分に尊重されなければならないが、4月12日以降生じたものは、他人の権利を侵害する騒乱である。4月12日に内務省で非常事態宣言した後、15 - 20分間自動車を赤シャツ隊に包囲されたが、彼等は私の命を狙っていることをひしひしと感じた。その後、治安維持責任者に、兵士は正当防衛の場合を除いて、空に向けて発砲するように命じさせた。

4月13日は早朝から軍がディンデーンを占拠した赤シャツ隊の排除を開始し、4人の兵士、2人の赤シャツ派が銃撃され負傷した。後者の二人の銃撃傷跡からみて、軍隊の銃以外によるものであることは明白である。13日赤シャツ派はガスを燃料とするバスに放火すると脅し、極めて危険な状態になった。（4月22日、チャトゥポンは、ガスバスをディンデーんに引き出して火をつけると脅したのはニセ赤シャツであり、その証拠もあると語った）しかし、この日の夜までには大部分の場所は平静に戻った。この日、ナーンロー

ンの2名の死者の外、100人ほどが負傷した。13日夜、総理府前で集会する赤シャツ派は2000 4000人程度に減少したが、政府側は弾圧のために踏み込むことを避け、帰宅したい人には援助を与える方針を取った。

翌3月14日、赤シャツ派が集会を止めた際にも、非常事態宣言に違反して違法集会を続けたにも拘らず、リーダー以外は逮捕しなかった。赤シャツの一部は総理府からサナム・ルアンやワン・デーンに移動して集会を続けたが、強権を用いることなく話し合いで解散させた。

不公正に憤って赤シャツ派の集会に参加した人に次のように答えたい。政治のルールが不公正である問題は、自分も重大視している。それ故、プラチャーティポック研究所に憲法改正の中心機関となるように依頼する案を出したが、同研究所の中立性に野党が疑問を呈しているため未だ進行していない。しかし、政府は、できるだけ早く赤シャツ派内の民主主義信奉者の希望に答えたい。汚職などの刑事犯と憲法上の集会の権利を行使した者とは区別して考えている（この発言から、翌4月20、21日にアピシットは国民融和のために、赤シャツ派中の政治事件で公民権停止中の者を恩赦するのではないかという憶測を呼んだ） コミュニティ・ラジオやD Stationの強制閉鎖に不満な者もいるようだが、閉鎖した局は違法な煽動をしたものに限っている。二重基準についても、政府は赤シャツと黄シャツを差別することはない。黄シャツ派の違法事件の捜査を早く完了させるように警察司令長官に求めている。（5月25日、警察は黄、赤両方の指名手配犯のポスターを作成して公開した）

私は、過去3 - 4ヶ月の首相在任時、自分の利益は何一つ考えたことはない。ただ、今解散総選挙をやれば、2007年末の総選挙時と同じ法規のもとでの選挙となり、（憲法237条の規定により党執行部の一人の選挙違反で）政党が解散になることもある。それでは従来の混乱の繰り返しである。また、今選挙をやれば暴力事件が多発しよう。それゆえ、憲法の非民主的な条項を、民主的な制度にまず改正し、国内が平穏になったところで総選挙をやるつもりである。

4月24日午前零時過ぎのアピシット国会演説と非常事態解除

筆者がバンコクに到着して、早速4月24日午前1時過ぎに国営テレビ放送NBTをつけてみると、丁度30時間続いた4月22、23日の上下両院合同国会が終了したところであった。この直前に、アピシット首相は1時間に亘る演説を行った。24日夜、NBTは、アピシット演説を再放送した。アピシット演説の内容は4月19日のそれとほぼ同じであるが、重要と思われる、いくつかを取り出すと、次の通りである。

今回の国会演説では、与野党とも赤シャツ派の4月事件に関して様々な資料を提出して議論した。どれが正しいかを調査するために、与・野党議員および上院議員の3者からなる調査委員会の設置を提案したい。

昨年サマック、ソムチャーイ両政権が出した非常事態が失敗した理由は、最終的な責

任を政治家が負う体制ではなく、軍、警察に責任を押しつけたからだ。そこで今回は、ステーブ副首相を政治面の責任者に任じ、責任体制を明確にした。非常事態宣言は、騒擾鎮圧のためだけに限定的に適用する。非常事態宣言を、憲法上の権利に基づいた集会を強制的に解散するため、あるいは、反対勢力を駆逐するという政治目的のためには、使用しないことを言明する。

二重基準についての批判が強いが、赤シャツ派がその判決を二重基準として批判する、憲法裁判所や最高裁判所政治家刑事事件部（一審制）は、赤シャツ派が復活を求めている1997年憲法で設けられた新制度ではないか。それにこれらの判決が出されたのは私の政権時ではない。現在国会を解散しても、ルールが現状のままなら党役員の選挙違反の結果、政党の解散という事態が再度起こり得る。また、現在の対立した状況のもとでは暴力事件が生じる心配もある。

私には非常事態を利用して政敵を弾圧する考えは毛頭ないので、本日4月24日（正午）に非常事態宣言を解除する。

但し、王室を守ることをお願いしたい。4月20日付のFinancial Timesのタクシン元首相インタビュー記事で、タクシン元首相は、「国王はクーデター計画を事前に枢密院議員から聞いて知っておられた」と、述べている。（同紙4月20日版、“Thaksin claims Thailand's king knew of coup plot” by Robin Wigglesworth in Dubai and Serena Tarling in Londonには、タクシンが同紙とのインタビューで、「スラユット大将、ブレイム大将の両枢密院議員およびもう一人の枢密院議員が、国王に謁見し、不忠者のタクシンを取り除いて国王のお役に立ちたいと申上げた。これが全ての始まりであった。この謁見の後には、（タクシン政権が）反政府行動を抑えようにも、軍部の背後で焚き付ける者がいて軍人は誰も協力しなくなったので法律を実施できなくなった」と語ったという件がある。これは、3月27日にビデオリンクで語ったことと同種の話である、但し、27日にはスラユットの作り話であり国王は関知されるはずはないと言い、国王の関知を否定している）これは重大なことなので、私は名前が挙がった3名の枢密院議員に尋ねたが、そのような事実はなかった。王室に触れたり、王室の名をかたったりすることは止めなければならない。現在法務省事務次官に、王室が政治的対立に利用されないようにする方法を考えさせている。

アピシットの演説が終了した時、国会では滅多にない拍手が起ったという。タイ政治では、説得的な演説能力がいかに重要かを示した一場面であった。野党もアピシットの改憲、恩赦計画に一定の評価を与えた。

聞き終えたとき、筆者もアピシットの演説に感銘を覚えた。あとから考えると、二重基準については、民主党政権の黄シャツ断罪の遅滞など、不都合な部分は避けているなど、うまく言いくるめたと、思う節もあったが。

4月24日夜国営テレビ放送NBTで、チョームサクを司会者とする前出の番組を見た。彼も4名の出演者も、アピシット首相は当初は経験不足から心配されたが、予想された以上にうまくやっていると評価した。続いて、チョームサクは、外国では政治家が虚偽の

話しをただけで大事件となるが、仏教国の我国では五戒の一つとして嘘は禁じられているにも拘らず、人々はそれほど重要なことだとは考えていないようだと言った。出演者から前日の30時間国会で、虚偽?の資料(軍による赤シャツ派銃殺など)を示して政府を追及した野党に対する批判を引きだそうとしたためであった。しかし、あまりに党派的な質問に、出演者は答えなかった。最後に、出演者たちは、アピシットの演説が野党にも比較的好意的に受け取られたという判断を示し、その一因は、日曜日の首相演説で公民権を停止されている政治家の恩赦につながる発言をしたためであろうという解釈を述べた。

法務省事務次官に王室が政治的対立に利用されないような方法を検討させているというアピシット発言は、不敬罪の要件などの法律改正を意味するのだろうか。これと同時に、肥大化した枢密院の改革も不可欠だろう。但し、王室の政治利用の受益者であったのは誰か、あるいは民主党と枢密院議長との仲、を考えると、民主党政権下での本格的改革が可能かどうかは疑わしい。しかし、もし実現できれば、タイ政治の長期的安定化のために大きな貢献となることは間違いない。

非常事態宣言の機会を赤シャツ派や野党弾圧のために利用せず、国民の融和・和解を指向したことも、賢明な選択であった。ただ、利用したくとも、相当数の国民が潜在的赤シャツ派支持者であるという現実を前に、使えなかったのかも知れないが。いずれにしても、やぶ蛇を避けたことは評価できる。

4月25日(土)夜、赤シャツ派の再集会

非常事態宣言の解除と同時に、ウィーラなど3名の赤シャツ派の中核リーダーも保釈された。非常事態宣言が解除された翌日の25日夜、サナム・ルアンで早くも赤シャツ派の集会が開かれた。開始間もない18時少し前に筆者が立ち寄ると、既に2000 3000人が集まっていた。但し、赤シャツを着た人は半数不足で、残りは赤のスカーフだけか、全く赤を着けていない人も多かった。これは用心のためだろうか。集まった人は、殆ど色の黒い人たちで、色の白い黄シャツ派とは対照的である。立ち見の中には僧侶も目についた。まず、逮捕を回避した赤シャツのリーダー、チャラン・ディターアピチャイが壇上に立ち次のように述べた。

4月14日に総理府前の集会をウィーラが打ち切ることを宣言した時、マスコミは我々が負けたと報じた。しかし、我々は決して負けてはいない。不利な状況になったので、戦術的に退却しただけに過ぎない、赤シャツの組織は90パーセントを温存することができた、と。

家に帰って集会の演説の続きを聴こうとラジオのチューナーを合わせたが、タクシン派タクシーのコミュニティ・ラジオの放送は、非常事態時に強制的に放送中止に追い込まれたので、当然のことながら既に存在しなかった。翌日のテレビ報道では、25日夜の赤シャツ集会は、従来の戦術を変え、アピシット首相の辞任などは要求せず、またタクシンのphone-inもなく、ただD Stationの再開と早急な改憲を求めただけであったという。

国民融和団結、改憲の掛声

メキシコ発の豚インフルエンザ（タイでは養豚業者への悪影響を考え、報道開始から2 - 3日後に「2009年新型インフルエンザ」と改称した）でタイも大騒ぎを始めた4月27日の午後、タイ国会は、与野党上院の3者 Whip の協議の結果、政治問題解決のため、国民融和・改憲委員会の設置を決めた。この委員会は40名（議席数に応じて各政党に割り当てる下院議員委員23名、上院議員委員7名、外部委員10名）からなり、15日以内に結果を出すという。しかし、その後 Phua Thai 党が要求して4月事件の真相究明の委員会も設置された。両委員会の最初の会合は予定より遅れ、5月10日前後となった。

また、4月27日には、次のような報道があった。即ち、Phua Thai 党では今後の赤シャツ派の活動方針を転換して、タクシン一人のためではなく、また、王室に抵触するようなことは止め、真の民主主義を求める運動に方針を転換する、また、リーダーもタイラクタイ党の「10月世代」（1973 - 76年時に共産主義の影響を強く受けた学生世代）に変える、と。そこで名が挙げたのは次の人物である。

チャトゥロン・チャーイセーン（Chaturong Chaisaeng）1956年生、チャチョンサオ県出身の華人、スワンクラブ校からチェンマイ大学医学部、同大学生自治会議長、4年生時に76年10月6日弾圧事件が生じ、共産党の武力闘争に参加。1977年10月から地下『アティパット』編集長（1999年8月25日チョンティラー・インタビューによる）。投降後、アメリカ留学、ニューヨーク州立大で経済学の修士号取得。博士課程在学中86年の総選挙に立候補のため帰国し民主党から当選。88年総選挙以降は新希望党所属で当選、96 - 97副蔵相、99 - 2001年新希望党幹事長、01年タイラクタイ党で当選。同党副党首、総理府大臣、02年法相続いて副首相。05年文相、06年9月19日クーデター後、タクシン党首に代って党首代行、07年5月30日タイラクタイ解党判決により5年間の公民権停止。

プーミタム・ウェーチャチャイ。1953年生、チュラーロンコーン大学政治学部に入学し、クリアンカモン・ラオハパイロート、アネーク・ラオタマタットらと学生左派政党を結成し自治会執行部を獲得。1975年に同大卒後も活動家、10月6日事件以後共産党の武力闘争に参加し79年投降。その後、農村開発のNGO活動、2001 - 06年タイラクタイ党副幹事長、03年交通大臣

プロムミン・ロートスリヤデート元タクシン首相秘書官・元エネルギー相など。共産党の武装闘争に参加し、南イサーン（南東北タイ）地区で医師。

これはウィーラ、チャトウボン、ナタウットの3中核リーダーが、大金を投じた20日間の闘争で結果を出せなかったため、タクシンにクビにされたということであるらしい。もしそうであれば「今日の真実」出身中核リーダーの終焉である。

4月27日には、赤シャツ派活動家の一人で、元タイ共産党の闘士スラチャイ・セーダーンが、タイ共産党下のタイ国人民解放軍の軍服・帽子を着用して自首したこともあって、

今後タクシン派はかつての共産党の如く地下に潜って闘争をするかもしれないという、非現実的な憶測が一時賑わった。

5月4日には、バンコクのシーロム路で、記者協会らを中心に「タイ国を破壊するのを止めよう」のデモが挙行された。シンボルはタイ国旗をプリントした白シャツ。これ以後全国各地で官主導のサマーナチャン（考え方を一つに融合する）キャンペーンが実施されている。

5月5日は、国王の戴冠式59周年記念日である。この日、スクムパン・バンコク都知事は、従来の戴冠式記念日には例を見ない、異例の大規模な祝賀のお祭りを実施した。バンコクのパーンファーからサナム・ルアンまでの大通りと広場で、リーケー、コーンなどの伝統芸能が上演された。そのため会場の道路は、同日2時過ぎから交通止めとなり、その周辺の道路端には、地方から上京した見学者の大型バスが延々と駐車していた。スクムパン都知事は、王族の末裔でありロイヤリスト民主党の所属である。彼には、赤シャツ派によって傷つけられた王威を修復する意図があったようだ。

終わりに

アピシット民主党が騒擾を起した赤シャツ派を徹底的に弾圧せず、寧ろ融和姿勢、和解路線を強めたのは、国会における PhuaThai 党の議席数の大きさ、その背後にある赤シャツ派を支持するグラスルーツの民衆の潜在力の大きさを意識してのことであろう。貧富の格差の大きなタイ社会では、中間層の厚みが増しているとは言え、所得の低い下層の人々の数は圧倒的である。タクシンが全力投球した20日間の闘争で、赤シャツ派の集会者は最高10万足らずであったが、赤シャツ派支持の潜在的すそ野は極めて広いのである。

本年2月半ば、筆者は中北部のキャンペーンペットからピサヌロークを調査旅行したが、その際話した人の中で、明確な黄シャツ支持者は、サワンカローク市の裕福な華人指導者だけであった。彼の先祖はこの市の華僑の草分けで、元来製材業者であったが、プレーム首相時代に森林伐採が禁止されたので飲料水・製氷業に転換したという。彼は、タクシンの汚職を厳しく批判し、同市の裕福な階層は黄シャツ支持者であると語った。（筆者のゼミの博士課程在学生の K さんはラムパーン市内の華人商家のむすめだが、タクシン派の地盤である北タイ、ラムパーン市でも、市内の裕福な商人たちは黄シャツ支持者であるという。）サワンカロークは、タクシン派から民主党に寝返ったソムサク・テーパスティンの地盤である。しかしこの人は、ソムサクに対しても厳しく、地元の利益になることは殆どせず、政府の建設事業で儲かっている男と切り捨てた。

ピサヌロークのホテルの横の店では、赤シャツ派グッズ（シャツ、スカーフ、小旗、足またはハート形の拍手小道具）は何でも売られていた。キャンペーンペットからスコタイまで雇ったピックアップの女性運転手は、タクシン政権時に始めて地券が出たので土地を担保に借金をすることができるようになった。その金でピックアップを買い、運送業を開業することでできた。ガソリンが高い時は、自分の車の使用を控えるので利用客が多かった

が、ガソリンの値段が下がったので、利用客が減少したとぼやいていた。彼女によれば、同業者の殆どは熱烈なタクシン支持派であるという。王制を話題にすると、彼女は、「高い所」(buang sung,王室を指す)の話はしない方がよいと答えた。これがタイ人の伝統的な感覚であろう。従来、タイの農民はこのような感覚であったにちがいない。

筆者の友人で、某大学で中国政治を教える W 氏は、1970年代半ばの学生時代に、多くの同世代の学生同様にタイ共産党の運動に参加した経験を有する。彼は、当時の仲間たちとの最近の飲み会での会話を筆者に次のように披露した。仲間の一人は、総理府前の赤シャツ派の集會に潜り込み周りの参加者の会話を耳をそばだてていたところ、その内容の過激さに驚いたという。集會者たちは口々に、遠慮会釈無くタイの政治支配体制と支配者たちを酷評しており、「大衆の方が指導者以上に進んでいた」からである。

タクシンの既存政治体制、「お上の政治」批判は、その他の事件と相まって、民衆の体制批判の心理的障壁を下げたようだ。

赤シャツ支持派のタクシー運転手多数との会話から、彼らが頑なに赤シャツ派の宣伝を信じていることが判る。政府の説明にも拘らず、4月13日早朝にディンデーンで赤シャツ派が銃殺されたと本気で言い張る運転手もいた。また、チャカポップ・ペンケーの武力闘争宣言に賛同して、そのうちに、バンコクは南タイと同様に火の海になるだろうという運転手にも会った。5月10日、帰路、空港まで乗ったタクシーの運転手は、赤シャツ支持をする理由を、貧富の格差が大きいかと説明した。筆者が、それでは金持ちの財産を貧者に配分して欲しいのかと問うと、そうではなくて経済政策で貧者の所得が向上することを期待していると答えた。タクシン支持の下々の貧しい民衆に対する政府の宣伝は、未だあまり効果を挙げてはいないようである。タイ社会では、依然彼らの階層が多数派である。タイの学界で高い尊敬を受けている C 教授も、この点を懸念して、筆者に今回は従来になく下層の民衆が政治化しているので、深刻な状況だと語った。